

一九世紀末のアメリカ南部における

農業不況の特質

小 沢 健 二

一 はじめに

二 戦後における農業生産構造の変化

三 プランテーション経営の再編

(一) 農村商人の台頭と綿花取引の流通・信用機構の変化

(二) プランテーション経営の再編と白人小農民の台頭

四 南部における世紀末農業不況の特質

(一) 綿花価格の下落とその原因

(二) 八〇年代までの農民層分解の動向

(三) 九〇年代の南部における農業不況の様相

五 おわりに

一 はじめに

南北戦争前の南部農業を特徴づけていた黒人奴隷労働にもとづく綿花・煙草などの大プランテーション経営は、戦後、黒人奴隷の政治的解放によつて、その経営基盤を掘り崩されることになった。戦後における南部農業は新たに創出された“自由労働”を前提に再建されたのである。しかし、戦争の結果による流通・信用機構の瓦解、および当時の南部を支配していた資本不足のもとでは、南部における農業再建は後述するような作物質受け制と、シエ

ア・クロッパ―に象徴されるような極めて奇型的な形態をとらざるをえなかった。

こうした南部の戦後における農業再建のあり方は、戦争直後にほのかにみえた奴隷解放という曙光を打ち消し、周知のように、その後第二次大戦にいたるまで、南部社会をアメリカのなかで最も後進的な地域として閉じ込めるにいたったのである。

ところで、一九世紀末にアメリカを席捲する農民の第三政党運動、ポピュリズム運動の中心地域は中西部と並んで南部であった。南部における運動の高揚は、世紀末において南部農民が置かれていた経済的狀態——戦後の南部における農業再建のあり方と、それに規定、増幅されていた農業不況の影響——を背景にしていた。

小稿は、南部においてポピュリズム運動が高揚した経済的背景を説明することを課題としている。アメリカにおいては南北戦争後の南部社会の歴史研究については、最近とくに盛んであるが、日本においても戦後の南部の農業構造の研究については、いくつかの労作がすでに存在している。小稿は、こうした労作に屋上屋を架することになりかねないが、南北戦争前の南部経済については既存の研究を前提としつつ、とくに研究の焦点を、戦後再建について解明されていないいくつかの問題点の抽出、および南部における農民の階層分解と農業不況の特質を分析することに置いている。

まず、二で一九世紀後半の南部における農業生産の推移を概観する。つぎに三で、戦後、プランテーション経営の再編がどのように展開されたかを、綿花の流通・信用機構の変質との関連で考察する。四では、主要作物、綿花の価格動向とそれを規定していた諸要因を分析し、そのうえで、こうした価格動向のもとで、どのような農民層分解放が南部で進化したかを考察する。とくに、九〇年代の綿花などの価格下落が大幅な時期に、南部農民が陥った経

済的狀態の解明を通して、南部におけるポピュリズム運動の經濟的背景を明らかにすることを課題としている。

注(1)

南北戦争後の南部農業についての研究は日本においてもいくつか存在するが、最もよくまとまった研究成果は、私人の範圍では、本田創造、大塚秀之「南北戦争後の南部農業の展開——プランテーション制の再編成をめぐって——」(都留重人他編『アメリカ資本主義の成立と展開』所収)である。

なおアメリカにおける再建南部をめぐる研究動向についての紹介としては、井出義光「再建史学の潮流」(『史学雑誌』第六六卷第四号)が詳しい。

二 戦後における農業生産構造の変化

南北戦争前、一九世紀前半の南部農業は、プランテーション経営のもとで綿花、煙草など輸出作物の単作経営に特徴づけられていた。とくに、産業革命を経たイギリス綿工業の發展は、南部における綿花栽培を助長し、綿花生産量は、一八三〇～六〇年に七三万捆から三八四万捆へと急増⁽¹⁾し、すでに綿花生産地域も南・北カロライナ州からアラバマ、ミシシッピ州など深南部への西漸が進行していた。しかし、黒人奴隸を使用したプランテーション経営のもとで、綿作、煙草作などのモノ・カルチュア農業が進展していた一方で、南部の主要食料である、コーン、豚などの生産の比重も大きかった。

一八六〇年で見ると、合衆国全体のコーンの四三%、豚の総飼育頭数の五五%が南部でそれぞれ生産、飼育され、南部の一部では西部からの食料移入に依存していたものの、戦前期には南部では、食料のかんりの部分が自給されていたのである。⁽³⁾この南部における食料の自給はプランテーション経営の内部でも追究されたが、プランテーションの外部に市場経済から切り離され、自給自足的な生活形態をとっていた多くの白人農民の存在とも密接に関連し

第1表 南部における主要農業生産指標

	1860	1870	1880	1890	1900
乳 牛 (1,000頭)	3,096 (36.1)	2,495 (27.8)	3,428 (27.5)	4,199 (25.4)	4,282 (25.0)
肉 牛 (1,000頭)	8,577 (50.3)	6,963 (46.8)	10,239 (37.6)	14,191 (34.5)	13,031 (36.9)
豚 (1,000頭)	18,329 (54.6)	11,442 (45.5)	17,932 (36.0)	15,981 (27.8)	18,611 (29.6)
全 穀 物 (10万ポンド)	433,587 (65.8)	303,423 (42.2)	258,419 (18.1)	176,464 (9.9)	245,495 (10.8)
小 麦 (1,000ブッシェル)	45,866 (26.5)	36,741 (12.8)	52,812 (11.5)	51,939 (11.1)	93,804 (14.2)
コーン (1,000ブッシェル)	364,089 (43.4)	252,110 (33.1)	374,786 (21.4)	446,157 (21.0)	629,720 (23.6)
綿 花 (1,000捆)	5,387	3,012	5,755	7,453	9,535
煙 草 (1,000ポンド)	350,205 (80.7)	194,214 (73.9)	338,252 (71.6)	360,495 (73.8)	665,607 (76.7)

出典: 12th Census of the U.S., Vol. 5, pp. 704-706, Vol. 6, pp. 422-425, pp. 528-529.

注 1. 家畜の飼育頭数の増大は、もっぱら Central South で生じており、South Atlantic では1860-1900年に、肉牛、豚の飼育頭数、ともに漸減している。

なお、綿花はほとんど南部で生産されていたので、南部の構成比は省略してある。

2. () 内はアメリカ全体に占める南部の比率(%)。

ていた。^④このように戦前期の南部社会を特徴づけていたのは、輸作物に特化していた奴隷所有階級のプランテーション経営者と、自給的な農業生産に従事していた大半の白人農民が経済的な相互関係のないままに併存していたことであった。

南北戦争とその後の経済的混乱により南部農業は大きな打撃を受けることになった。とくに、プランテーション作物である綿花、煙草の生産量の減少は著しく、七〇年代中頃まで綿花生産量は戦前水準に達しなかった。しかし、その後における綿花および煙草の生産の伸びは急速であった。一八七〇と一八八〇年に綿花・煙草いずれの生産量も三倍以上に増大している。これと対照的に、穀物の生産量、および家畜の飼養頭数の伸びは停滞的であった。穀物全体をとつ

第2表 南部の人口の推移

(単位: 1,000人)

	南部			アメリカ合衆国		
	合計	都市人口	農村人口	合計	都市人口	農村人口
1850	8,983	744	8,236	23,192	3,544	19,648
60	11,133	1,067	10,067	31,444	6,217	25,227
70	12,288	1,497	10,791	38,558	9,902	28,656
80	16,517	2,017	14,500	50,156	14,130	36,026
90	20,028	3,261	16,767	62,947	22,106	40,841
1900	24,524	4,421	20,103	75,995	30,160	45,835

出典: U. S. D. C., *Historical Statistics*, Part I, p. 11, p. 23.

てみると、その生産量が減少したのを始め、生産量の増大がみられる小麦、コーンにしても、生産量の伸びは大きくない。一八九〇〜一九〇〇年にテキサス、オクラホマ州など西南部で、小麦、コーンの生産量は増加するものの、その他の南部地域では一八六〇〜一九〇〇年に生産量はほとんど増加しなかった。同様に豚、肉牛、乳牛などの飼育頭数の伸びも小さい。とくに南部における主要な蛋白食料である豚の飼育頭数がほとんど増えていないのが特徴であった(第1表)。

ところで、一八六〇〜一九〇〇年に南部の人口は、自然増と西南部への入植によって、一一〇〇万人から二四五〇万人へと二倍以上に増加した。このうち、鉄道建設と関連した内陸部における都市の勃興による都市人口の増加が目立つものの、人口増の大部分は農村人口であり、農村人口はこの時期に一〇〇〇万人から二〇〇〇万人へと二倍に増大した(第2表)。このため、一九世紀後半には南部の農村人口一人当たりの穀物生産量、家畜の飼養頭数は戦前期の水準を下回るようになったのである。

こうした農業生産に関する指標は、南部を総体としてみるならば、一九世紀後半にモノカルチュア的な農業経営が地域的差異を含みながらも、一層、強まったことを示している。そして、この傾向はとくに、綿花、煙草の産出

第3表 作物生産額に占める綿花生産額の割合(1900年)

アラバマ州	59.5%
ジョージア	58.9
サウス・カロライナ	60.7
ミシシッピ	66.0
アーカンソー	59.5
テキサス	59.2

出典: 12th Census of the U.S.,
Vol. 6, pp. 422-425.

州で顕著だった。農業総生産額に占める綿花生産額の比率は、東南部・中南部では一九〇〇年にそれぞれ三二%、四三%にのぼったが、なかでも綿花生産の伸びが顕著だったデルタ地域のアラバマ、ジョージア、およびミシシッピ州、西南部のテキサス、アーカンソー州などでは、この比率は六〇%、あるいはそれ以上に達したのである(第3表)。

ケンタッキー、ノース・カロライナ、テネシー、

ヴァージニア州などの煙草生産州における煙草生産量の伸びも急速だった。これら四州の煙草生産量は一八七〇〜一九〇〇年に一億七五〇〇万ポンドから六億一四〇〇万ポンドへと三・五倍増している(第4表)。

ところで戦前においては、綿花や煙草は地力収奪的な農法で生産され、当該地の地力が枯渇すると農地の移動をとまって生産地域の外延的拡大が進行した。戦前に綿作地が東南部の大西洋沿岸地域からデルタ地域に徐々に西漸したのも、こうした地力収奪的なプランテーションの経営方法に起因していた。⁽³⁾戦後も綿作地が中部へ西漸した事実にみられるように、こうした傾向は継続していたものの、プランテーションの再編、分割の結果としての小農民の創出、入植の進展による開発可能

第4表 煙草生産量の推移 (単位: 1,000ポンド)

	1870	1880	1890	1900
ケンタッキー州	105,306	171,121	221,880	314,288
ノース・カロライナ	11,150	26,986	36,375	127,503
テネシー	21,465	29,365	36,368	49,158
ヴァージニア	37,086	79,989	48,523	122,885

出典: D. B. Dodd & W. S. Dodd, *Historical Statistics of the South, 1790-1970*, pp. 25, 41, 53, 61.

な農用地の減少などが重なり、地力収奪的な農法の転換が迫られることになった。とくに、農法の転換は面積が狭小だった東南部で目立って進行した。綿作地、煙草作付地で金肥の増投がみられ、煙草農場では反収増が実現したほか、綿作地でもそれまでの反収の減少傾向がくいとめられたのである⁽⁶⁾。

こうした集約的な農業経営は、戦前に市場経済から隔離されていた白人の小農民が綿花や煙草の生産に従事するようになるにつれ、強まっていった。戦前、綿花生産に従事していたのは黒人奴隷であったが、戦後、綿花価格が高騰するなかで綿花生産に従事する白人小農民の数は、年を経るにしたがって増加していった。一九〇〇年で見ると綿花の生産州では白人農民の場合でも、六〇%以上が農業所得の五〇%以上を綿花に依存するようになっていた。⁽⁷⁾ところで、一九世紀後半には南部ではプランテーションの再編、入植の進展、小農民の自立などによって農場数は急増した。一八六〇〜一九〇〇年に農場数は、東南部では三〇万から九六万へ、中南部では三七万から一六六万へとそれぞれ大幅な増加を示している。同様な農場数の増加がみられた中西部、西部では、同時に農場数を上回る耕地面積の拡大がみられたのに対し、南部では農場数の増加は耕地面積の拡大をはるかに上回って増加していた^(第5表)。

こうした傾向は、とくに東南部で顕著であった。この結果、一八六〇〜一九〇〇年には一農場当たり平均耕地面積は、東南部では九〇エーカーから四八エーカーへ減少し、アメリカ全体のなかで南部における農場の経営規模が最小になっていた。このため、一農場当たりの平均資産額、農機具所有額は、東南部および南部デルタ地域で最小になっていた。例えば、一九〇〇年における農業従事者一人当たりの平均農場資産額の点では、東南部、デルタ地域はコーン・ベルトの七分の一程度にすぎず、しかも一九世紀後半を通して、農場資産額、農業機械の所有額の伸

第5表 農場数、耕地面積の変化

		農 場 数 (1,000)	耕 地 面 積	
			総 計 (1,000エーカー)	1農場当たり (エーカー)
全 国 計	1860	2,044	163,111	79.8
	1870	2,660	188,921	71.0
	1880	4,009	284,771	71.0
	1890	4,565	357,617	78.3
	1900	5,737	414,498	72.2
東 北 部	1860	565	38,982	69.0
	1870	602	41,117	68.3
	1880	696	46,386	66.6
	1890	659	42,338	64.3
	1900	678	38,921	57.2
中 西 部	1860	772	52,309	67.7
	1870	1,125	78,410	69.7
	1880	1,698	136,842	80.6
	1890	1,924	184,292	95.8
	1900	2,197	222,314	101.2
東 南 部	1860	302	34,901	115.6
	1870	374	30,203	80.7
	1880	644	36,170	56.1
	1890	750	41,677	55.6
	1900	962	46,100	47.9
中 南 部	1860	370	33,232	89.7
	1870	511	31,089	60.8
	1880	887	49,807	56.2
	1890	1,087	66,289	61.0
	1900	1,658	80,008	48.3
西 部	1860	35	3,687	106.4
	1870	48	8,103	168.1
	1880	84	15,566	185.9
	1890	146	23,020	157.9
	1900	243	27,156	111.8

出典: *12th Census of the U.S.*, Vol. 5, pp. xvii~xxii.

注. 東南部 (South Atlantic).....Delaware, Maryland, District of Columbia, Virginia, North Carolina, South Carolina, Georgia, Florida.

中南部 (South Central).....Kentucky, Tennessee, Alabama, Mississippi, Arkansas Louisiana, Oklahoma, Texas.

第6表 農業従事者1人当たりの農場物的資産額 (単位:千ドル)

	1870	1880	1890	1900
合 衆 国	2.9	3.2	3.4	3.7
東 北 部	3.5	3.7	3.4	3.6
南 東 部	0.8	0.9	0.9	0.9
湖 岸 諸 州	3.2	3.9	3.8	4.3
コ ー ン ・ ペ ル ト	5.3	5.7	6.0	6.5
デ ル タ 地 域	0.8	0.9	0.9	1.0
グ レ ー ト ・ プ レ イ ン	3.4	4.7	6.1	7.9
テ キ サ ス ・ オ ク ラ ホ マ	2.7	2.6	3.0	3.8
山 岳 地 域	1.7	4.7	5.1	6.4
太 平 洋 沿 岸	13.7	11.6	9.1	9.8

出典: Tostlebe, *Capital in Agriculture*, p. 88.

びがほとんどみられなかったのが、他地域に比べて南部の特質になっていた(第6表)。

このように、一九世紀後半には多数の小農場が創出されたが、これらの小農場の経営規模は小さく、しかも経営面からみるとほとんど技術的進歩のないままに市場経済に包摂され、モノ・カルチュア化していったことが南部農業の特徴であった。

注(一) U.S.D.C., *Statistical Abstract of the U.S.*, 1929, p. 706.

(二) 南北戦争前にすでに労働力一人当たりの綿花の作付地、および綿花の単収が南カロライナ州などの旧南部よりもミシシッピ州などの中南部のほうが大きく、中南部での綿作経営が旧南部地域よりも有利になっていた点については、L. C. Gray, *History of Agriculture in the Southern United States to 1860*, Vol. II, 1938, pp. 707-709 参照。

(三) この点については、平出宣道「奴隷制南部の地域類型構造」(都留重人他編「アメリカ資本主義の成立と展開」)、一七二〜一七八頁参照。

(四) D. C. North, *The Economic Growth of the United State, 1970-1860*, 1966, p. 130.

(五) ただし、一律に南部全体で戦前に地力収奪的な綿作経営が行われていたわけではない。土地に制約がある東南部では、厩肥や石灰も使用されたし、一八四五年頃から、一時的にグアノの使用も盛んになった。

また、この時期に驛馬に種々の作業機（とくに鋤）を付けた耕作方法が一般的になり、それまでの手作業に比べて労働生産性の伸びは著しかった（L. C. Gray, *op. cit.*, pp. 700-704, 706-710）。

- (6) 煙草の場合には、小農場制のもとの集約耕作により単収の伸びが目立った。例えば、ノース・カロライナ州では作付地の伸びは二五〇％増だったが、生産量は三七五％増になっている（M. Jacobstein, *Tobacco Industry in the U.S.*, 1907, p. 59）。

なお、中西弘次「一九世紀後半における農業生産と流通の展開」（都留重人他編、前掲書所収）三〇三頁では、一九世紀後半に綿花の単収が伸びたとの記述があるが、それは単年度を取り出したからであり、五カ年平均の数字をとってみると、この時期には綿花の単収の増加はほとんどみられない。

- (7) *The 12th Census of the U.S.*, Vol. 5, pp. 51, 53. 一八七六年には綿花生産量の四〇％がすでに白人農民によって生産されていたが、一九一〇年までにその比率は六七％にまで増大している（R. B. Vance, *Human Factors in Cotton Culture*, 1929, p. 60）。

三 プランテーション経営の再編

(一) 農村商人の台頭と綿花取引の流通・信用機構の変化

南北戦争は南部経済に甚大な被害を与えた。戦争による物的破壊により、戦争直後の南部における資産額は、戦前の二分の一以下の水準にまで落ち込んだ。⁽¹⁾さらに、北部から流入したカーペット・バッグによる略奪行為や土地への重課税は、⁽²⁾南部人による自発的な経済再建を困難にしていた。なかでも、南部の主要作物、綿花・煙草の生産にとって大きな影響を与えたのは、戦争を通してこれら農産物の流通・信用機構が大きな変質をとげたことである。

周知のように、戦前には綿花は仲買業者（ファクター）の手を経て、生産地のプランテーションからチャールストンやニュー・オリンズなど南部の主要港湾都市へ出荷され、そこから東部のニューヨークやボストンなどの商業都市に再出荷されるか、あるいはリヴァプールへ、直接、輸出されていた。南部の港湾都市とリヴァプール、東部の商業都市を結ぶ、いわゆる綿花貿易の三角関係が形成されていたのである。⁽³⁾この場合、仲買業者はプランターから綿花取引を委託される一方、プランターに対して生産資財ばかりでなく、彼らの日常用品や奢侈品を信用で供与していた。通常、仲買業者は、プランターが振り出した手形を南部の諸銀行や東部の金融業者に割り引いてもらう一方で、プランターに与えていた信用を綿花の収穫代金で決済していた。このように、仲買業者は単なる綿花の取引業者として機能していたばかりでなく、プランターに対する信用供与者の役割を果たしていたのである。こうした港湾都市に拠点を有する仲買業者が地方市場まで含めて綿花取引を支配しえたのは、綿花が主として大プランテーションで生産されていたため、地方での綿花集荷が比較的、容易だったことによっていた。

しかし、戦前の仲買業者の多くは戦争中の綿花生産の瓦解によって没落し、戦争直後には綿花取引に空白状況が生じた。⁽⁴⁾このなかで地方市場における綿花取引業者として台頭してきたのが、かつての旧仲買業者と比べるとはるかに小さな資本規模しか有さない農村商人であった。そして、この新興の農村商人の台頭は、戦後の南部における鉄道建設の進展とともにみられた内陸部における都市の勃興、およびそれと密接に関係していた商業および金融取引ルートの変化と結びついていた。

戦後における南部の鉄道建設は、中西部におけるほど急速ではなかったというものの、七〇〜八〇年代にかけて、鉄道営業マイル数の伸びは急速であった。一八七〇〜九〇年に東南部における鉄道営業マイル数は七三四九マイル

第7表 地域別鉄道営業マイル数の推移

	1860	1870	1880	1890年
東 北 部	9,500	14,203	19,843	25,342
中 西 部 { 東 北 中 部	{ 9,583	{ 14,701	{ 25,102	{ 37,470
{ 西 北 中 部	{ 1,472	{ 18,040	{ 18,994	{ 39,197
東 南 部	5,976	7,349	9,789	18,803
南 西 部	4,072	6,230	13,715	31,557
西 部	23	2,393	5,746	15,609

出典：Statistical Abstract 1891, pp. 263-264.

から一万八八〇三マイルへと二・五倍へ、中南部においては、六二三〇マイルから三万一五五七マイルへと五倍弱増と、それぞれ急激な伸びを示していた（第7表）。また、南部における都市人口も一八七〇～一九〇〇年に一五〇万人から四四二万人へと三倍弱も増加した。

すでに、戦前においても生産地から近接の内陸部の都市に出荷され、そこからニューヨークなどの東部市場に再出荷される綿花量が増大していた。例えば、一八六〇年には内陸部で生産された一部の綿花は、メンフィスからオハイオ州のシンシナティまでオハイオ河を河川輸送され、そこから鉄道で東部市場に輸送されていた。さらに、七〇年代になると東部市場まで鉄道による一貫輸送が実現したほか、鉄道で大西洋沿岸都市まで輸送され、そこから海運で東部市場まで運ばれる綿花量も増大するようになった。⁽⁵⁾

この場合、農村商人が生産地で生産者から綿花を購入し、これを内陸部を拠点とする仲介業者や輸出代理業者に販売し、さらにこれらの仲介業者が東部市場で、輸出業者や紡績会社に再販売する仕組みになっていた。⁽⁶⁾そして、生産地で綿花を買い上げた農村商人が、振り出した手形は地方銀行で割り引かれ、さらに地方銀行は東部の金融市場に信用を依存したほか、綿花商人が振り出した手形が東部の金融市場で割り引かれる場合もあった。また、イギリスに輸出される綿花につい

ては、輸出業者が振り出した手形にマーチャント・バンカーが裏書きを与えるという形で、マーチャント・バンカーも綿花の輸出金融業務に関係していた。このような綿花の金融システムが生産地↓内陸部都市↓東部市場（あるいはリヴァプール市場）という経路を通る綿花取引関係を補完していたのである。⁽⁷⁾

ところで、これらの農村商人の一部は戦後、南部に流入してきたユダヤ商人であるといわれているが、大部分は土着の南部人であったとみられ、⁽⁸⁾ 彼らは南部の各地域に均等に存在していた。彼らの資本規模も平均すると五〇〇〇〜一万ドルとそれほど大きくなかったが、戦前の旧仲買業者が大港湾都市に居住し、綿花生産地から遠方にいたため、生産者と効率的に接触できなかったのに対し、農村商人は戦後の混乱期に農村経済に密接に関与し、地域で綿花の流通過程を支配するようになったのである。⁽⁹⁾

地方市場で綿花取引の中心となったこうした農村商人の台頭は時期的にみると、戦争直後の六〇年代後半から棉花や煙草の生産拡張が最も顕著に進展していた八〇年代に目立っていた。そして、彼らは農民に対しては棉花あるいは煙草の購入者の立場に立つ一方で、都市の卸売り商会、肥料生産業者などの代理人として農民への商品供給者になっていたばかりでなく、外部資本を農村に導入するチャンネルの役割を果たしていたのである。⁽¹⁰⁾

こうした農村商人は、棉花取引の一環として地域で綿繰り業や倉庫業を兼ねることも多かったが、農民への信用供与の代償として農場で栽培されている農作物（棉花・煙草）を担保物件に設定した。栽培中の作物を質にとつたのは、他に適当な担保物件がなかったからであり、それは戦後の南部農村における資本不足と貧困の象徴でもあった。これが周知の作物質受け制（クローズ・リエーン制）であり、この質受け制を通して、農村商人は単に地方市場での棉花の取引商人としてばかりでなく、信用供与者として農民に対して、次第に経済的に強い立場に立っている。

った。

具体的には、資本不足のなかで農村商人は作付け前に農民に生産資金を貸し付け、収穫代金から前貸し金を回収していた。とくに、小作農民に対しては生産資金ばかりでなく生活資金も貸し付けることが一般的だった。⁽¹¹⁾これが悪循環のくり返されるなかで、農民は資金返還の義務のためにも現金作物（綿花・煙草）への特化を余儀なくされ、農業経営の多角化が阻まれたばかりでなく、資金面から農村商人への従属化が一層、強められたのである。

資金面での依存関係は、農村商人と地主との間でも例外ではなかった。作物質受け制を正当化するクロップ・リーン法は六六年にジョージア州で制定されたのを皮切りに、七〇年代以降南部全域に広がっていった。この過程で、作物質権の第一の取得者が地主であるか、あるいは農村商人であるかが問題になった。というのは、地主は自己のプランテーション内の分益小作農に資金の前貸しを行っていたが、同時に地主が農村商人から信用を受ける立場にあった。さらに、農村商人自身が地主を介さず直接に小作農に資金を前貸しすることも多かったからである。

この結果、農村商人が作物質権に対して第一の取得権を与えられ、地主が農村商人に債務を負う過程のなかで、農地を失い、農村商人が地主に転化するケースも多くみられた。もちろん、逆に地主が小作農民への生産資金や日常用品の供給者、および綿花取引業者として農村商人を兼ねる場合もあった。そして、この地主の商業業務はプランテーション内に設立された店舗を通して行われ、プランテーションの農場経営と密接に結合されていた。⁽¹²⁾また、農村商人と地主が当該地域で別々に存在した場合には、農村商人と地主との間で綿密な関係が形成され、両者があいまって、農村で綿花の信用、取引業務の独占体として小作農民に対応したのであった。⁽¹³⁾

このように南北戦争後、六〇年代後半から七〇年代前半にかけて、旧仲買業者の没落という空白状況のなかで、

農村商人が台頭し、綿花（煙草）取引業者および信用供与者として、地方市場で流通過程を支配し、農民に対して支配的な立場を確立するようになっていった。

ところで、農村商人が綿花、煙草の流通、信用機構を掌握する過程は、戦後、プランテーション経営が再編される時期に相当していた。

注(1) この点については、E. Q. Hawk, *Economic History of the South*, 1934, p. 249 参照。

(2) 一八六六～七七年にルイジアナ州を例にとりてみると課税率は倍増していた。このため、旧プランターは公的債務の支払いのために栽培中の作物を質入れることもあった（R. W. Shugg, "Survival of the Plantation System in Louisiana", *The Journal of Southern History*, Vol. 3, pp. 317 ff）。

なお、カーペット・バーガーによる略奪行為は、かつての旧南部の中心地域、ノース・カロライナ、ミシシッピ、アラバマ州などとともに目立っていた（E. Q. Hawk, *op. cit.*, pp. 434-440）。

(3) 南部の諸港から綿花がヨーロッパに輸出される場合、ニューヨーク港が介在して南部の綿花輸出港、ヨーロッパの諸港、ニューヨーク港の三角形のルートで、二つの異なった主要な貿易の動きがみられた（本田創造『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』、二一～二二〇頁）。

ただし、戦前の一八三〇年代頃からメンフィスやナッシュヴィルなど内陸部の都市での綿花取引が盛んになっており、この綿花取引には地方銀行もすでに関与していた（L. C. Gray, *op. cit.*, pp. 711-715）。

(4) ただし、戦争直後には綿花価格が高騰するなかで戦前からの仲買業者の台頭も一時的にみられ、戦前のファクトレージシステムが復活するかにみえた（H. D. Woodman, *King Cotton & His Retainers*, 1968, p. 287）。

(5) この点については、*ibid.*, p. 271. また、戦後におけるこうした綿花取引経路の変化によって、戦前、南部の主要港湾都市で綿花金融に従事していた東部の金融業者も、戦後、その金融業務をニューヨークに集中するようになった（J. C. Brown, *A Hundred Years of Merchant Banking*, 1909, pp. 275-77）。

(6) 綿花の流通・取引関係については、少し時代が後になるが、W. H. Hubbard, *Cotton and the Cotton Market*, 1924,

pp. 137-150 の叙述が具体的である。なお、実際には綿花の具体的な出荷、取引方法は、地域によっても生産者の規模によっても異なっていた。大規模な綿花生産者の場合、農村商人に売却する代わりに自らの裁量で内陸都市に搬出して、ブローカーに直接、売却する場合も存在した。なお、綿花取引方法についての邦文の研究については、M. Schwartz, *Radical Protests and Social Structure*, 1976 に依拠した池本氏の「南部小作制度の基礎構造について」(永田啓恭編『アメリカ独占資本主義の研究』所収、二二四～二三〇頁)がある。

- (7) なお、南北戦争中に南部の主要国法銀行が没落し、戦後になっても国法銀行、州法銀行の設立件数は他の地域に比べるとはるかに少なかった。しかし、一八八〇年頃までに比較的規模の小さい地方銀行が多数、設立されるようになった。こうした地方銀行は保険業務なども営んでおり、地域で地主や商人に対して信用借入を行っていたが、これらの地方銀行と東部の金融業者との関係、綿花金融面で果たしていた役割については、必ずしも解明されていない。

綿花金融について前掲の大塚・本田論文では、農村商人を全国の銀行制度にしっかり結びつけ、北部に対する南部の金融的従属のあらたな経路が打ち立てられていた(同論文、二三四頁)としている。南部における金融制度が未整備だったことは確かである。ただし、最終の綿花購入者が取引決済を東部市場なり、リヴァプールで行うことによって綿花取引は完結する。同時に、綿花金融にともなう商業手形の割引も当然、東部の金融市場なり、ロンドン市場で最終的に行われることになる。これは綿花取引の経済関係に起因することであって、これをもって大塚氏などのように北部に対する南部の金融的従属が強まったとはいえない。ただし、綿花金融の実態についての詳細な研究が少ないので、この分野は今後の重要な研究課題となろう。

- (8) 農村商人の大部分は土着の南部人であったというのが通説である(H. D. Woodman, *op. cit.*, p. 303)。ただし、こうした農村商人が戦前にどのような職業に従事していたのかは明確でなく、今後の解明をまたなければならぬ。
- (9) R. L. Ransom & R. Sutch, *One Kind of Freedom*, 1978, p. 125, pp. 128-142. なお、同書は奴隷解放の経済的意義を計量経済史の立場から実証的に論じた南北戦争後の南部農業についての最新の研究成果である。すでに同書については秋元英一氏による詳細な紹介がある(秋元英一「南部経済の停滞とシェア・クロッピング制度——R・L・ランサム、R・サッチ『ひとつの自由』をめぐる』(関東学院大学三十周年記念論文集、一九七九年五月号所収)。
- (10) この点については J. D. Clark, "The Furnishing and Supply System in Southern Agriculture", *Journal of*

Southern History, Vol. 12, pp. 24-26.

(11) “初春に農民達は農村商人の所へ出かけ、作物を質入れることによって信用を結び、時には不動産や動産も抵当に入れる。それから、衣類、農具、金肥など時々に必要なものの供給を受け、その勘定を年末に収穫代金から控除して決済する。” (R. P. Brooks, *The Agrarian Revolution in Georgia, 1865-1912*, p. 74)°

(12) 地主がプランテーション内に店舗を有する場合には、地主は小作農に掛け売りし、その代わりに作物質受け権を得、年末に店の勘定書 (store bill) から控除して、信用借与を決済した (R. B. Vance, *op. cit.*, p. 64)°

(13) R. L. Ramson & R. Sutch, *op. cit.*, pp. 147-148.

〔二〕プランテーション経営の再編と白人小農民の台頭

戦争直後にはプランテーション経営は大混乱に陥った。というのは、連邦政府の意向を受けた軍務当局によって没収・処分されるプランテーションもあつた⁽¹⁾、主要な労働力だった黒人の地域間移動も頻繁に生じたからである。戦争直後には多数の黒人が自由を求めて、南部の諸都市に移動し、プランテーション経営に必要な黒人労働力自体が枯渇した。さらに、それまでの黒人の奴隷労働にもとづいた労働慣行の变革は、戦前の形態にのっとったプランテーション経営の再建に対する大きな障害となつて⁽²⁾いた。

しかし、六五年になると法令によって旧財産が元の所有者に返還され、さらに戦後の綿花価格の高騰に刺激されて、“自由労働”を前提とした新しいプランテーション経営の試みが旧プランター達によって積極的に押し進められるようになった。こうした“自由労働”を前提とした新しいプランテーション経営は、かつての黒人奴隷を賃労働者として雇用し、賃銀制度の導入による資本家的な農場経営を目指したもので軍務当局によっても支持されてい

た。しかし、こうした資本家的なプランテーション経営は、サウス・カロライナ、ジョージア、アラバマ州など各地で試行されたが、いずれも短期間で挫折した⁽³⁾。

この賃労働を利用したプランテーション経営の失敗は、労働慣行および資金面からの要因に起因していた。まず、プランテーション経営を成功させるためには、賃銀水準が低い黒人労働に依存せざるをえなかったが、奴隷として長期間、使用されてきた黒人は賃労働慣行に馴じんでいなかったため、賃銀労働者としての黒人の労働効率は極めて悪かった⁽⁴⁾。しかも、六〇年代まで牧畜業がさかんだったテキサス州やアーカンソー州など新開の南西部への大量の移民が南北戦争中からみられ、これらの地域における労働需要が高まるにつれ、黒人労働力の多くは旧南部地域から流出し、ここでは労働力の確保すら困難になった。さらに、すでに考察したように戦前にプランターに信用を供与していた南部の港湾都市に依拠する仲買業者の一部が戦争中に没落したことにより、プランター達は賃銀支払に必要な資金入手も困難であった。この資金面からの制約も賃雇用にもとづくプランテーション経営に不利に作用したのである。

こうした「自由労働」にもとづいたプランテーション経営の失敗の結果、低賃銀労働力を安定的に確保したいというプランターの意向と、自己の裁量で恒常的に農業経営を行いたいという賃銀労働者の意向の妥協の産物として生み出されたのが分益小作制度の導入であった⁽⁵⁾。賃労働制にもとづいたプランテーション経営は、監視人のもとでの罰則をともなったきびしい組作業であり、こうした労働様式は戦前の奴隷時代と本質的には異ならないため、黒人にとって忌避されたのである。そして、ジョージア州を例にとると、プランテーションの再編は六九年末から始まり、かつてのプランテーションは、多数の個々の農場に分割されていったが、この分割の過程で農地の所有権の

第8表 自小作別、農場数の比率

(単位：%)

	自作農			定額小作農			分益小作農		
	1880	1890	1900	1880	1890	1900	1880	1890	1900
東南部	63.9	61.5	55.8	11.6	12.8	17.9	24.5	25.7	26.3
中南部	63.8	61.5	51.4	11.8	14.0	17.3	24.4	24.5	31.3

出典：12th Census of the U.S., Vol. 5, p. 689.

細分化はともなわなかったことが特徴であった。⁽⁶⁾

ただし、一口に分益小作制といっても、農地以外の生産手段を所有し、本来の意味での小作農の範疇に属するものから、驟馬や簡単な農業用具まで地主に依存し、完全に地主に経済的に従属している、いわゆるシェア・クロツパーまで多岐にわたった。奴隷から解放された黒人の大部分は、この最下層のシェア・クロツパーに属していたのである。

一旦、導入された分益小作制は、七〇年代にアップパー・サウスからデルタ地域にかけて急速に拡大していったが、一八七〇～七一年にかけて綿作地帯では、地主と小作農との契約関係はシェア・クロツピングが支配的になっていった。そして、アラバマ、ジョージア、サウス・カロライナ、およびミシシッピなどの各州では、小作農に関するセンサス統計が初めて登場する一八八〇年までに、全農家の三〇～四〇%がすでに小作農に分類されていた(第8表)。

こうした分益小作制の導入によるプランテーション経営の再編は、かつてのプランテーション経営者の変質をも生み出すものであった。

すでに、戦前に多数の黒人奴隷を有し、大規模なプランテーションを経営していたプランターの一部は戦争中に没落したし、戦後、経営者として残る場合にも、経営はかつての管理人にまかせて都市に居住して不在地主化する者も存在した。また、プラ

ンター（地主）として残る者も、新たな信用供与者としての農村商人に資金を依存し、資金債務を負うなかで農村商人が地主を兼ねるケースも多くみられた。逆にプランターが地主として留まりえた場合には、すでに述べたようにプランテーション内で商業業務を兼ねることが多くなっていた。いずれにせよ、賃雇用労働にもとづくプランテーション経営から分益小作制に基礎を置くプランテーションに経営が再編される過程は、このように農場所有のプランターから農村商人への移転が最も頻繁にみられた時期であった。⁽⁷⁾

ところで、賃雇用にもとづいたプランテーション経営が挫折するなかから生み出された分益小作農は、独立した小作農の形態をとっていたものの、とくに黒人の場合には、プランテーション内の区々に細分化された圃場で、監視人の管理下で一定時間、働く現物供与の賃銀労働者としての性格を強く有していた。⁽⁸⁾そして、分益小作農の小作料は前貸しを受ける程度によって異なっていたが、生産資金の大部分を地主から供与される場合には、地代として収穫高の半分を支払うのが一般的であった。⁽⁹⁾

このように分益小作農の収穫取り分が少ないものでは、分益小作農は恒常的に資金債務を負い、綿作のモノカルチュア経営に一層、特化せざるをえなかった。こうした傾向は分益小作農が流通および信用面を通して、農村商人や地主の収奪の対象になっていたという事情ばかりでなく、黒人農民は奴隸時代に綿作以外の農法の経験を有さず、農業経営者として陶冶される機会がなかったという労働力の資質の面も加わって、一層、強まったのである。⁽¹⁰⁾

このように南北戦争後、世紀末までは、作物質受け制が南部社会に定着し、プランテーション経営が再編される時期に相当していた。⁽¹¹⁾この過程で、解放黒人の大部分は統計上は分益小作農に分類されているが、事実上は現物給与の賃銀労働者と異ならない、いわゆるシェア・クロッパーに転化したのである。しかも、彼らは作物質受け制に

第9表 白人、黒人農民別自作農比率（1900年）
（単位：％）

			白 人	黒 人
東 南 部	自 作 農		64.9	29.3
	自 小 作 農		0.8	0.2
	經 営 者		1.2	0.3
	定 額 小 作 農		10.7	34.8
	分 益 小 作 農		22.4	35.4
中 南 部	自 作 農		60.5	22.3
	自 小 作 農		1.0	0.2
	經 営 者		0.7	0.1
	定 額 小 作 農		9.5	37.9
	分 益 小 作 農		28.3	39.5

出典：12th Census of the U.S., Vol. 5, p. 4.

よって縛られた債務奴隷者として自主的な農業経営の権限をほとんど与えられていなかった。一九〇〇年センサスでみると、賃銀労働者が自作農に分類されている黒人農民は二〇～三〇％であり、残りの七〇％以上の黒人農民は小作農に分類されていた（第9表）。そして、南部全域を通してみても、黒人による耕地の所有比率は極めて低く、一八八〇年でも黒人によって所有されている耕地は、全耕地の一〇％前後にすぎなかった。⁽¹²⁾

ところで、すでに二で述べたように戦前、綿花生産に積極的に着手するようになった。こうした傾向はプランテーション経営がまだ発達していなかったテキサス州などの西南部で著しかった。さらに、西南部では新たに綿花のプランテーション経営も開始され、黒人労働力を南・北カロライナ州などのアッパー・サウスやジョージア州などに求めたので、西南部、デルタ地域へ黒人労働力が大量に移動し、労働力が流出した旧南部地域では地価の低下が著しかった。一八六六年における地価は、南部全域を平均すると戦前水準の一六～二五％であつたし、ジョージア州を例にとると、一八八〇年代中頃まで耕地価格は戦前水準に達しなかった。⁽¹³⁾

このため、旧南部地域でも農地の購入による経営規模の拡大が白人農民にとって可能になったのである。

七〇年代の中頃までに綿花生産量の四〇%がすでに白人農民によって生産されるようになっていた。そして、黒人農民の大部分が小作農であったのとは対照的に、前掲の第9表に示されるように、白人農民の場合には相対的に自作農の比率が高かった。一九〇〇年で見ると白人農民の自作農率は約六〇%以上になっている。

ところで、白人農民の場合も戦後の資本不足のなかでは、農業経営に着手する際、あるいは経営規模を拡大する場合には、農村商人に資金を依存せざるをえなかった構造は同じであった。同時期の中西部でみられたような農場の抵当融資による信用確保の道が途絶されていたからである。⁽¹⁴⁾ このため、下層の白人農民が農業に従事する際には農業労働者や小作農として出発せざるをえなかった。また、自作農に上進した場合でも、綿花価格が低落したり、不作が続く場合には作物質受けによる債務を負って容易に小作農に転落したのである。⁽¹⁵⁾

しかし、南部の小農民（もち論、小作農を含めて）は、作物質受け制を通して資金面から農村商人に依存していたものの、自作農と小作農との間、および白人農民と黒人農民との間には隔絶的な経済格差が存在していた。このことを統計数学によって概括的に裏付けておこう。

一九〇〇年で生産額別にみると、東南部では農業生産額が二五〇ドル以下の農場数の比率は、自作農の場合、四一・一%なのに対し、分益小作農ではこの階層に属する農場数の比率は四九・二%にのぼっている（第10表参照）。しかも、分益小作農の場合、この農業生産額のうち、二分の一は地代として控除されたから、単純計算によっても分益小作農の所得水準は自作農の二分の一以下だったことになる。

次に、白人、黒人別にみると、一九〇〇年に東南部、中南部のいずれでも白人農民の場合、その六五%以上が五〇エーカー以上の農地を経営し、その平均経営規模は前者で一三二エーカー、後者の地域で一九五エーカーにのぼ

第10表 南部——東南部、中南部別——における農場（白人・黒人農民別）
の階層構成（1900年）（単位：％）

①東南部

	白人農民	黒人農民	自作農	定額小作農	分益小作農	全 体
農 場 数	673,354	288,871	474,540	172,699	252,899	962,225
生産額別						
0～1ドル	0.6	0.8	0.4	0.9	0.9	0.6
1～	3.2	9.5	4.2	7.5	5.5	5.1
50～	6.7	13.3	8.1	10.5	8.8	8.7
100～	28.4	35.5	28.4	32.0	34.0	30.5
250～	32.6	30.4	31.0	32.3	34.0	32.0
500～	19.4	9.2	19.4	13.0	12.6	16.3
1,000～	7.7	1.2	7.4	3.2	3.8	5.7
2,500～	1.4	0.1	1.2	0.2	0.1	1.0

②中南部

	白人農民	黒人農民	自作農	定額小作農	分益小作農	全 体
農 場 数	1,206,367	451,799	743,097	286,091	519,455	1,658,166
生産額別						
0～1ドル	1.1	1.8	0.8	1.6	1.9	1.3
1～	3.1	5.2	2.7	4.5	5.1	3.7
50～	6.1	7.5	5.5	6.9	7.9	6.4
100～	27.3	31.5	26.2	28.7	32.5	28.4
250～	33.2	36.4	34.2	35.7	33.5	34.1
500～	20.9	15.0	22.2	17.9	15.2	19.3
1,000～	7.1	2.3	7.2	4.1	3.7	5.8
2,500～	1.3	0.2	1.1	0.8	0.3	1.0

出典：12th Census of the U.S., Vol. 5, pp. 30-31.

っていた。これにたいし、黒人農民の場合、東南部では農場数の六五％が、中部では七一％が五〇エーカー未満層であった。そして、黒人農民の平均経営面積は、東南部では五四エーカー、中部では五一エーカーであり、白人農民と比べるとその経営規模は三分の一から四分の一程度にすぎなかった（第11表）。

このように、南部

第 11 表 白人，黒人農民の規模別農場数の割合（1900年）

①白人農場

	～10 エーカー	10～20	20～50	50～100	100～175	175～
	%					
東 南 部	4.5	6.9	21.4	24.1	22.7	20.4
中 南 部	3.4	7.9	23.2	23.9	24.8	16.8

②黒人農場

	～10 エーカー	10～20	20～50	50～100	100～175	175～
	%					
東 南 部	10.5	14.0	42.0	18.8	9.9	4.8
中 南 部	5.3	17.3	48.4	17.3	8.4	3.3

注．白人農場の平均農場規模，東南部では131.7エーカー，中南部では194.6エーカー．黒人農場の平均農場規模，東南部では54.1エーカー，中南部では50.9エーカー．

出典：12th Census of the U.S., Vol. 5, pp. 2-3.

農民の経済状態はアメリカの他の地域に比べると総じて劣悪状態に置かれていたものの、さらに自作農と小作農との間、および白人農民と黒人農民との間には、大きな経済格差が存在していたことが分る。

南北戦争後、一九世紀後半の時期にプランテーション経営が再編されるなかから、黒人農民の大部分はシェア・クロッパーを含む小作農となり、しかも農村商人に債務を負うなかで、自立的な農業経営者に上昇する道が閉ざされていった。一方、独立した白人の小農民も多数、創出されたが、戦前と異なる点は、彼らが綿花、煙草生産の中心的な担い手になっていったことである。彼らも農村商人に信用を依存していた事情は同じであったが、自作農として経営規模を拡大できる可能性ははるかに大きかったのである。

南北戦争後、世紀末までの南部農業はこうした二重の農民階層を含みながら、市場経済にますます包摂される形でモノカルチュア農業の性格を強めていった。

そこで、次に綿花の価格動向をも分析しながら、やや時系列的

に南部における黒人、白人農民の階層分化がどのように進展したかをみ、あわせて南部における世紀末の農業不況の実態にふれていくことにしよう。

注(一) Oscar, Zeichen, "The Transition from Slave to Free Agricultural Labor in the Southern States", *Agricultural History*, Vol. 13, p. 23 によると、一八六三年の法令により、軍務局は没収または放棄された農地を財務局に引き渡すという形でプランテーションの処分を行った。しかし、六五年になると没収した農地を元の所有者に戻すという法令が出されたので、実際には没収令による農地の再配分は少なかったものとみられる。

(2) ただし、都市には黒人の就業機会が存在しなかったこと、都市の白人住民の敵対的な対応などにより、再び、黒人は農村に戻り、六六年頃までに黒人労働力の都市への移動も一段落した。また、黒人労働力は旧南部から新開南部へも移動したが、これは、デルタ地域および西南部での労賃水準が旧南部よりはるかに高かったからである。例えば、ミシシッピ・デルタ地域では賄いつきで月二〇ドルが黒人の労賃水準だったが、旧南部では賄いつきで五〜一五ドルであった(以上の点については R. L. Ransom & R. Sutch, *op. cit.*, pp. 60-62)。とくに南北戦争中に農村から都市への黒人の移動が活発だったことについては C. Kelsey, *The Negro Farmer*, 1903, p. 12 参照。

(3) 黒人労働の賃雇用にもとづいたプランテーション経営がいきまへた経緯については O. Zeichen, *op. cit.*, pp. 28-31 参照。

(4) アフリカから奴隷としてアメリカ南部に運ばれ、白人の監視下で奴隷労働になじんできた黒人は、南北戦争の結果、自由を確保したが、『自由とは拘束されない怠惰』というように受け取る風潮が強かったといわれる。このため、賃銀労働者としてプランテーションで雇用されても、遍あるいは月の始めに給料をもらうとすぐに農場から逃亡する例も多かった(R. P. Brooks, *The Agrarian Revolution in Georgia 1865-1912*, 1914, pp. 18-22)。B. I. Wiley は 1924 年『自由労働制とは自由はあるが、労働しなうことを意味したという』(B. I. Wiley, "Visistudes of Early Reconstruction Farming in the Lower Mississippi Valley", *The Journal of Southern History*, Vol. 3, p. 450) において、ヘンターの戦後経営についての最大の困難事は、黒人が戦争中から彼らに対して急激に反抗的な態度を示すようになったことだという指摘もある(C. Stiterson, "The Transition from Slave to Free Economy of the William J. Minor

Plantations", *Agricultural History*, Vol. 17, p. 218)。

なお、R. L. Ransom & R. Sutch, *op. cit.*, p. 65 では黒人の労働資質の面よりも、自由な黒人労働を効率的に使用できなかったプランターの経営能力の欠如のほうをより重視すべきだとしている。

- (5) 賃銀労働者の確保が困難だったことは、戦後の混乱状況のなかで地価が低下したため、農業労働者が農地を取得して自作農あるいは小作農になることが容易だったことも影響している。これは、かつてのプランター達が農場を売却に出したことが原因してゐる (R. P. Brooks, *op. cit.*, p. 37)。

- (6) なお、賃労働に依拠したプランテーション経営の失敗には、六六、六七年の干ばつによる綿花の不作も影響していた (R. L. Ransom & R. Sutch, *op. cit.*, p. 64)。⁶⁾ また、資本家的なプランテーション経営が挫折する過程で、黒人の自作農はついに創出されなかった。彼らは農地を購入する資金を有していなかったが、それと同時に、白人が黒人に農地を売却することを忌み嫌う風潮が南部ではとくに強かったことも影響してゐる (*ibid.*, pp. 86-87)。

- (7) 旧プランターは戦後、"自由労働制"のもとで賃労働による農場経営が失敗した時に、一部は不在地主化し、さらに農村商人に資金債務を負うなかで農地を失い、その所有権が農村商人に集中することも多かったとみられる。ただし、農村商人、地主、および小作農との相互関係は地域によっても異なっていたとみられ、農村商人が土地所有者としてどの程度の割合を占めていたかは、今後の研究をまたなければならぬ。

なお、クロップリユーン法をめぐる農村商人とプランターの対立は激化したが、ジョージア州では七五年法で両者の妥協が図られ、分益小作農に必要な物資を供給でき、労働力を管理できるほど資金余裕のあるプランターには賃権の権利を与えたが、それ以外の場合には、農村商人に賃権の第一の取得権利を与えた。また、小作農も地主を介さずに農村商人から直接、信用を受けることを好む傾向がみられた。この結果、七〇年代後半以降、プランターが不在地主化する傾向が強まった (R. P. Brooks, *op. cit.*, pp. 32-34)。⁷⁾ なお、農村商人が債務を返済できない農民の債務決済の最後の手段として抵当にとっていた動産や農地を取得し、この結果、地主になり、あわせて農村で店舗経営を行ったことについては、J. D. Clark, *op. cit.*, p. 43. なお、少し、時期が後になるが一九一〇年に主要南部一州で五人以上の労働力を有し、プランテーション経営とみなされる農場数は、二万二一五七であり、このプランテーションが所有していた耕地面積は、当該地域で一〇%を占めており、プランテーション経営は依然として高い比重を占めていた。そして、このプランテーション

ンで使用している労働力の一割は賃銀労働者で、九割はクロッパードット(C. O. Brannen, *Relation of Land Tenure to Plantation Organization*, U. S. D. A., Bulletin No. 1269, 1924, pp. 4-6)。

ここで、南北戦争前のプランテーション経営と一九一〇年におけるプランテーション経営とを概略的に比較しておく。一九一〇年と同一の南部一一州のプランテーション数は一八五〇年に八万八千七百七十七だったといわれる(本田氏、前掲書、五九頁の表より算出)。一方、一九一〇年のプランテーション数は二万二千二百五十七であるから、この数字だけからみると、南北戦争および一九世紀後半を通して、約二五%のプランテーションが存続し、残りのプランテーションが自作農場に分割されたり、小作農場として賃貸されたことになる。

(8) 実際には、プランテーションの再編のなから生み出された小作農の態様も、南部の各地域に応じて様々であったとみられる。すでに、南北戦争中および、戦後の混乱期のなかで自作農に上昇した黒人もいたし、逆に、プランテーション内で賃銀労働者として雇用し続けられていた黒人も存在していた。黒人全体の七〇%を占めた小作農の場合にも、本稿で紹介したように現物供与の賃銀労働者と異ならず、きびしい監視労働に服していたシェア・クロッパードットから、相対的に独立が保証されていた定額小作農まで幅があった。こうした黒人農民の様相については、C. O. Brannen, *op. cit.* がいくらかであるが、参考になる。しかし、ここでは、黒人のシェア・クロッパードットの場合には、ほとんど独立した経営主体ではなかったこと、独立が保証されている黒人農民の場合には、劣等地で経営することが多く、いずれも農村商人や地主による支配の軛から脱することは容易ではなかったことを確認しておけばよいだろう。

(9) 生産用具をほとんど所有しない分益小作農は、通常、收穫物の二分の一を地代として支払うが、生産用具を所有する小作農は、肥料を含む農業経営費、生産用具の提供の度合に応じて、地代は收穫物の三分之一から四分之一まで多様であった(B. H. Hibbard, "Tenancy in the Southern States", *Quarterly Journal of Economic*, Vol. 27, p. 486)。

なおシェア・クロッパードットは、自作小作農別の公的統計が始めて出される一八八〇年センサス以降、分益小作農のなかに一括されているが、本来の分益小作農とシェア・クロッパードットの間には四の三でも考察するように格段の経済格差が存在した。例えば、テキサス州では分益小作農が過半を占め、シェア・クロッパードットは相対的に少なかったが、分益小作農と自作農とはほとんど同程度の経営規模を有していたのに対し、シェア・クロッパードットの経営規模はその半分程度にすぎなかった(J. T. Sanders, *Farm Ownership and Tenancy in the Black Prairie of Texas*, U. S. D. A., Bulletin No. 1068,

1922, p. 16)°。センサスで分益小作農と分類されている者のうち、シェア・クロッパーの比率が地域によってどの程度の比率を占めていたかは、今後の解明をまたなければならぬ。

なお、C. Mildred Thompson, *Reconstruction in Georgia*, 1915 に依拠しながら、服部哲郎氏はプランテーション経営の再編の過程は黒人による集団労働(小労働班=スタジオによる)が小規模化する過程であったとしている(服部哲郎「再建期アメリカ南部におけるプランテーション農業制度の再編」、『史淵』第七三号、五三頁)。

- (10) 黒人は奴隷時代を通して白人の直接的な監視下でしか農業労働をしてこなかったもので、仕事を自分の責任で行う習慣がほとんど養われなかったし、また、農機具の使用方法も知らない者が多かった。また、自分の農地内で自給用のコーン、野菜なども栽培せずに農村商人から購入することが多く、結局、生活資金も前借りするという構造になっていた(C. Kelsey, *op. cit.*, pp. 26-33)°。議会報告書でも後でみるようにクロッパーの経済的状态を向上させるために、絶えず農業経営の多角化を勧告している。

ただ、こうした農業経営の多角化の方向も綿花信用を与える地域の“Vested interested”によって妨げられ、(R. B. Vance, *op. cit.*, p. 185) ていたが、その他の要因として黒人の農業経営者としての資質も影響していたことは間違いない。

- (11) こうして南部において再編されたプランテーションのタイプには以下の三種類があった。一、地主自身によって経営される比較的、小規模なプランテーション。二、資本家あるいは、会社によって所有される大プランテーションで、農業経営は管理人にまかされるもの。三、投機対象として不在地主が購入したもので、もっとも非能率的な経営がなされていたもの(R. B. Vance, *op. cit.*, p. 71)°。ただし、この三種類のプランテーションが各々、どの程度の割合を占めていたかは明らかでない。

- (12) R. L. Ransom & R. Sutch, *op. cit.*, p. 83.

- (13) *ibid.*, p. 51, R. P. Brooks, *op. cit.*, p. 39.

- (14) 例えば、ヴァージニア州の場合、農場の抵当件数、抵当融資額は中西部の各州に比べるとはるかに少なく、少額であった。一八九〇年における一農場当たりの抵当融資額は、同じ時期のカンザス州の一七〇〇ドルに対して、わずか六ドルにすぎなかった(W. D. Sheldon, *Populism in the Old Domain*, 1935, p. 13)°。

(15) こうした事情が白人農民の場合でも、アメリカのなかで南部の小作農比率が最も高い背景になっていた。

四 南部における世紀末農業不況の特質

(一) 綿花価格の下落とその原因

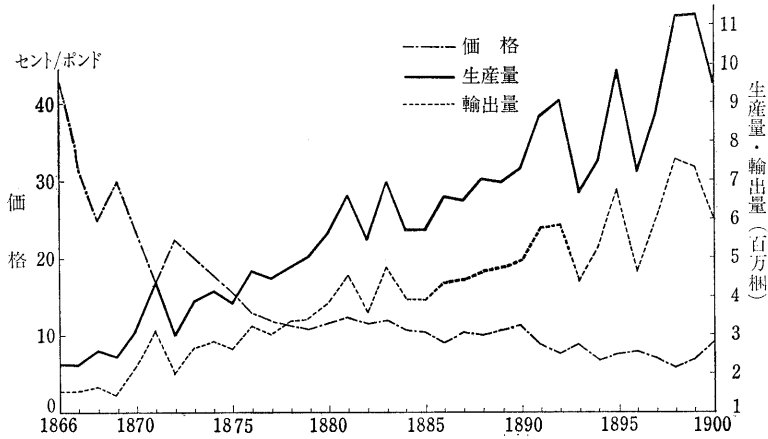
一九世紀に入って、アメリカにおける綿花生産は、イギリスにおける綿工業の発展と並行して増大していった。一八一五年以降にはアメリカでも綿工業の発展がみられ、国内の綿花消費量も著増するようになるが、三〇年代まで綿花生産量の八〇%以上は依然としてイギリスを中心とするヨーロッパに輸出されていた。一八三〇年代以降、ヨーロッパ大陸諸国およびアメリカ国内での綿花消費量の伸びはイギリスを上回るようになるが、一八六〇年においても世界の綿花供給量の過半はイギリスで消費されていたのである。⁽²⁾

また、南北戦争前には世界の綿花供給量の八〇～九〇%がアメリカで生産されており、世界的な綿花価格はアメリカにおける綿花の作柄と、イギリスを中心とする主要資本主義国における景気循環（綿工業の動向）によって規定される構造ができあがっていた。

南北戦争による南部での綿花生産の崩壊は綿花飢饉を生み、ニューヨーク市場における綿花価格は六〇～六四年にポンド当たり一セントから一ドル一セントにまで暴騰する。⁽³⁾ 綿花価格は六四年をピークに下落し始めるが、戦後の南部における社会・経済的な混乱のなかでは、綿花生産の回復は市場での価格動向に対応するような形では進まなかった。このため、ニューヨーク市場での綿花価格は七〇年代前半まで戦前水準を上回っていたのである。

ところで南北戦争後、アメリカ以外のエジプト、インドなど綿産国における綿花生産量も増大し始めた。だが、

第1図 綿花価格（ニューヨーク市場）



資料：Statistical Abstract of the U.S. 1902, pp. 347, 461.

第12表 アメリカ綿花の消費市場（構成比）

（単位：%）

	1859	1869	1879	1889	1893	1899
イギリス	55	48	36	40	35	32
ヨーロッパ大陸諸国	16	19	25	28	35	32
その他諸国	6	3	3	—	—	4
アメリカ合衆国	23	30	36	32	30	32
{ 北部	19.4	27	32	24	20	19
{ 南部	3.6	3	4	8	10	12
合 計	100	100	100	100	100	100

出典：U.S. Industrial Commission, *Report of the Industrial Commission*, Vol. 6, p. 171.

一〇八

八〇年代におけるアメリカの綿花生産量の伸びは、これら綿花生産国における生産の伸びをはるかに上回って大きく、一八九〇年においても世界の綿花供給量の五六%をアメリカで生産していた。⁽⁴⁾このため、イギリスを含むヨーロッパ諸国の綿花総輸入量に占めるアメリカの比率は、九〇年になっても七四%を占め（一八六〇年には八四%の高

第13表 綿花州における綿紡績業の進展の様相

——州別紡錘数の増加——

	紡 錘 数	
	1890	1900
アラバマ州	79,234	437,200
ジョージア	445,452	969,364
ノース・カロライナ	337,786	1,264,509
サウス・カロライナ	332,784	1,693,649
その他の	358,744	636,765
合 計	1,554,000	5,001,487

出典：Agricultural Year Book 1900, p. 809.

率を占めていたが、一九世紀後半を通してヨーロッパ諸国は、その綿工業の発展に必要な原綿供給の大半をアメリカに依存していたのである。⁽⁵⁾

同時に、南北戦争後には国内市場も次第に増大し、綿花生産量の三〇〜四〇％が国内の綿紡績工場で使用されるようになった。このうち、八〇年代までは国内における綿花消費の大部分は東北部地域であった。しかし、戦後に綿花の供給地域に設立されるようになった綿紡績業の発展は、八〇年代後半から顕著になり、九〇年代後半になると国内での綿花消費量の三分の一は南部で使用されるようになった(第12表)。

アメリカの綿花生産量は、七〇年に三〇〇万梱の水準を突破して戦前水準に回復する。その後、世紀末までの綿花生産量の伸びは著しい(第一図参照)。作柄が気象変動の影響を敏感に受けるだけに、年ごとの生産量の変動幅は大きいものの、一八七〇〜一九〇〇年に生産量は三倍増を記録し、一八九九年の綿花生産量は一一〇〇万梱に達した。とくに、七〇年代後半から八〇年代初頭、八〇年代後半から九〇年代初頭、および九〇年代後半以降における生産量の伸びは顕著であった。そして、輸出も生産量とほぼ並行して増大していたのである。

一方、綿花価格もまた、生産量および輸出货量の動向と密接に関連して推移している。⁽⁶⁾ 綿花価格の下落は、生産量の伸びが急激な七〇年代に顕著であるが、八〇年代には綿花の生産増にもかかわらず価格は比較的、

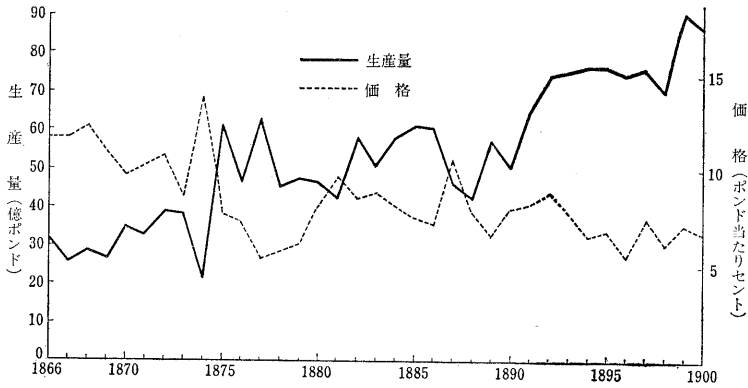
安定的に推移していた。これは八二年に恐慌現象がみられるものの、七三、九三年の恐慌ほどパニック性の強いものでなく、八〇年代の景気循環は一九世紀後半のなかでは比較的、安定的なものであったこと、また、ヨーロッパの主要資本主義諸国およびアメリカ国内で紡錘数が増加した事実にみられるように、依然として綿工業の発展が継続していたことなどに起因している⁽⁷⁾。このため、八〇年代まではアメリカにおける綿花の生産増にもかかわらず、世界的にみて綿花の需給関係はほぼ均衡していたといえよう。

しかし、九〇年代になると事態に変化がみられる。一八九〇年以降の世界的な不況の深化のなかで綿製品の購買量が減少し、世界的に綿花の需要減がみられたからである。アメリカでも例外ではない。とくに不況が深化する九三、四年には国内における綿花消費量も減少した⁽⁸⁾。一方、アメリカ国内における綿花生産量は増大し続けたため、世界的にみて綿花の供給過剰が南北戦争後、始めて顕在化したのである。

ニューヨーク市場での綿花価格は、九〇年のポンド当たり一一セントから連年下落を続け、九八年には六セントを割るにいたった⁽⁹⁾。綿花は主要工業原料品であったため、その価格動向は他の農産物、とくに小麦などに比べるとはるかに景気循環の影響を受けやすかった。この結果、綿花価格は八〇年代には比較的、安定的に推移しながらも九〇年代になると穀物の場合以上に価格の下落幅が大きく、しかも長期におよんだのである⁽¹⁰⁾。

ここで、綿花と並んで南部の主要な商品作物であった煙草の価格動向を簡単にみておこう。煙草の生産に占める輸出比率も綿花ほどではないにしても高く、一九世紀後半を通して平均すると四五～五〇%であった。煙草の生産量の伸びも綿花には劣っていたが、一八六六年の三〇億ポンドから一八九〇年代には七五億ポンド台に増大している⁽¹¹⁾。価格の動きも生産動向と対応して変化していたが、価格動向は綿花価格の場合よりは、比較的、安定してい

第2図 煙草の生産量および価格の動向



資料: *Historical Statistics*, Vol. 1, p. 518.

た。

第二図にみるように、他の農産物に比べると七〇年代後半に価格の落ち込みが大きかったのが特徴であるが、八〇年代にはポンド当たり八・一〇セント台を安定的に推移し、九〇年代に入っても九二年までは、煙草価格は比較的、高水準を維持した。価格が下落し始めるのは九三年からであり、九六年には最低水準五・五セント（ポンド当たり）を記録しているが、この場合の下落幅も九二年に比べ三〇％ほどであり、綿花の場合より小幅であった。しかし、煙草は嗜好品のため綿花の場合より市場が多様化しており、品目によつては九〇年代に入つてからの価格の下落幅は綿花の場合以上に大きかった。例えば、ノース・カロライナ州、ウィンストンにおける葉煙草の価格は、八九年のポンド当たり一二・三セントから九五年には六・〇セントへと二分の一以下の水準に下落した。⁽¹³⁾

このように煙草の場合も、品目によつては価格下落に大幅で、煙草作農民にきびしく作用したのであった。

ところで、綿花の流通はすでにみたように、まず生産農民から

綿繰り業を兼ねることが多い農村商人へ出荷され、さらに農村商人から内陸部の都市に拠点を持つ仲買人、ブローカーの手を経て国内で消費される場合には東北部や南部の工場に送られていた。穀物に比べると綿花の鉄道輸送コストは割安であった。このため、東北部の綿工場に出荷する場合、一九〇〇年に内陸部の中央市場までの綿花の流通コストは東北部における市場価格の一五%前後だったと報告されている。⁽¹⁴⁾

しかし、綿花の生産農民、とくにシエラ・クロッパーの場合には、農村商人や地主から信用を供与されて綿花生産に従事していたために、農村商人への売渡し価格からさらに一〇%前後の利子部分が控除されていた。⁽¹⁵⁾ このため、九〇年代にニューヨーク市場で綿花価格がポンド当たり六セントの水準にまで下落した際には、農民による綿花の受取り価格は——もち論、地域によって大きな差異を含みながらも——ポンド当たり四セント前後にまで下落した計算になる。綿花の市場価格がポンド当たり八セント台の時に綿花生産の収支が償えたと報告されているから、⁽¹⁶⁾ 九〇年代には綿花価格は明らかに大幅な採算割れとなったのである。

注(一) L. C. Gray, *op. cit.*, Vol. 2, p. 695 によると、一八一五年には国内での綿花消費量は九万梱だったが、四五年までには四〇万梱に、さらに六一年には九一万梱に増大している。

(二) ただし、一八五三年でみるとイギリスへ輸出された綿花量の約二〇%がヨーロッパ大陸諸国へ再輸出されていた (*ibid.*, p. 649)。なお、一八五一年までのアメリカの市場別綿花輸出货量、綿花価格などの動向については、J. D. B. DeBow, *The Industrial Resources*, Vol. I, pp. 144-150 が詳しい。

(三) U. S. D. C., *Statistical Abstract of the U. S. 1902*, p. 460.

(四) Hammond, *op. cit.*, p. 345.

(五) 周知のようにエジプト綿は高級綿製品の原料綿花だったため、その生産量は一九世紀後半にはそれほど増大しなかった。またインドの綿花輸出货量は、南北戦争を契機として一時的に急増するが、その後は自国内における綿工業の発展によって

棉花の輸出量はそれほど増加しなかった。

- (6) R. P. Vance, *op. cit.*, p. 127 以下、Engberg の研究成果によりながら、棉花価格と景気循環との相関係数はプラス〇・四八九で、かなりの相関関係がみられるが、棉花価格と生産量との相関係数はマイナス〇・六二であるから、生産量の動向によって棉花価格が規定される傾向がより強いと指摘されている。

- (7) 一八八二～九一年にイギリスにおける綿工業の紡錘数には目立った増加はみられないが、ドイツでは紡錘数は同期間に四七〇万鍾から六〇七万鍾へ、ロシアでは四四〇万鍾から七一五万鍾へ、イタリアでは八八万鍾から一六九万鍾へと、それぞれ顕著な増加がみられた (B. R. Mitchell, *European Historical Statistics 1750-1970*, 1975, pp. 434-435)。また、アメリカにおいても綿紡績業の紡錘数は、一八七九～八九年に一〇六五万から一四〇六万鍾に増加している (メンデルソン『恐慌の理論と歴史』I、四三八頁)。

- (8) イギリスを含むヨーロッパ、およびアメリカでの棉花需要は、八〇年代までの顕著な伸びに対し、九一～九七年には、ほとんど目立った増加がみられな (C. W. Burkett, *Cotton*, 1908, p. 64)。こうした不況の深化による棉花需要の停滞と並んで、一八九二年一月から九三年三月まで、ランカシャーの綿紡績工場でストライキが続き、これがアメリカの棉花輸出に大きな打撃を与えた (Hammond, *op. cit.*, p. 338)。

- (9) この九八年の棉花価格は、一九三二年について、史上、二番目の低水準である。

- (10) 棉花価格の長期的低落の原因を調査し、対応策を勧告するために一八九五年に発表された第五三議会、上院報告書「九八六」によると、棉花価格の低下の原因として、一、先物による棉花取引が市場で棉花価格を実勢以上に押し下げていること、二、アメリカでの保護関税の施行が世界的な貿易不振をまねき、このことがアメリカからの棉花輸出の伸び悩みの一因になっていること、三、銀銻貨が廃貨になったことによる通貨価値の上昇が棉花価格下落の最大要因となっている。(53rd Congress, Senate Report 986, *Report of the Committee on Agri & Forestry on Condition of Cotton growers in the U.S., the Present Prices of Cotton, the Remedies and on*, pp. viii-xiii) の以上、三点を指摘している。そして棉花の在庫量を推定し、棉花の過剰生産よりも通貨問題が当時の棉花価格の低落の主要因だと結論づけているが、この見解は通貨数量説の立場に立つものであり、当時のポピュリスト、民主党など急進派の政治主張の影響を多分に受けているものと推定される。

- (11) アメリカにおける葉煙草は、品種的にみると「バーレイ」と「ヘビー・シッピング」の二種目に大別できる。なお、アメリカの煙草輸出はヨーロッパ市場が主であり、ヨーロッパで輸入する葉煙草の五〇%がアメリカ産であった (M. Jacobstein, *The Tobacco Industry in the U.S.*, 1907, pp. 167-170)。
- (12) 一九世紀後半のアメリカにおける農産物価格の下落については、拙稿「一九世紀後半のアメリカにおける農民運動の展開」(『農業総合研究』第三二巻第四号、所収) 一〜四頁参照。
- (13) なお、Jacobstein によると煙草価格の下落には、不況の影響もあるが、アメリカ煙草会社に代表される煙草製造会社のトラスト形成が原料煙草の価格下落の大きな要因だという (*op. cit.*, pp. 76-80)。
確かに煙草の輸出価格をみると、八〇〜一九〇〇年まで極めて安定している。輸出業務がトラストにより独占されていた一方で、輸入業務もヨーロッパ各国で政府の主導下に独占体制が施かれていたことが、煙草の輸出価格の安定をもたらす大きな要因になっていたとみられる (*ibid.*, pp. 170-73)。
- (14) U.S. Industrial Commission, *Report of the Industrial Commission*, Vol. 6, pp. 177-185. こゝで示した棉花の流通コストは、当時の内陸部における最大の棉花市場、セント・ルイスの場合であった。なお、この流通コストのうち、農村商人のマージン(手数料倉庫料を含む)が六〇%弱、内陸部都市での仲買人のマージンが四〇%強を占めていると報告されている。
- (15) 生産農民にとつての流通コストの多寡は農村商人から信用供与されていたか、どうかで大きく異なっていた (*ibid.*, p. 178). *Report of the Industrial Commission*, Vol. 6, p. 178 では「一九〇〇年の利子率は平均七%として報告している。しかし、(1)での叙述でも明らかのように、実際には、はるかに高利子率が一般的だった。」
- (16) ポンド当たり八セントでようやく収支が償ふことができ、七セントでは損益を計上した (53rd Congress Senate Report 986, p. iv)。

(二) 八〇年代までの農民層分解の動向

すでに、(一)で考察したように南部における一農場当たりの平均農地面積は、東南部、中南部のいずれの地域でも

第14表 綿花作付面積、エーカー当たり収量、ポンド当たり平均農場価格（5カ年平均）

	(イ) 綿花作付面積 1,000エーカー	(ロ) エーカー当たり 収量	(ハ) ポンド当たり 平均農場価格 セント
*1866～70	7,346	0.39	14.3
71～75	9,403	0.42	12.1
76～80	12,923	0.41	8.0
81～85	17,204	0.35	9.3
86～90	19,427	0.37	8.4
91～95	20,436	0.40	7.0
*96～1899	23,991	0.42	6.3

注 1. 1 梱は陸地綿 (upland cotton) で約509ポンド、海島綿 (sea island cotton) では392ポンド。

2. * 1866～70年の平均農場価格は69～70年についての年間平均、96～1899年の平均農場価格は96～98年についての年間平均。

出典：Year Book of Agriculture (1900) p. 811.

綿花の摘み取りに要する費用（100ポンド当たり）

	セント		セント
アラバマ州	36	ミシシッピ州	39
ジョージア	38	サウス・カロライナ	38
ルイジアナ	40	テキサス	44

同上 p. 809.

一九世紀後半には急減した。東南部の場合、一農場当たり平均農地面積は一八六〇年の三五三エーカーから八〇年には一五七エーカー、さらに一九〇〇年には一〇八エーカーへと六〇年の三分の一以下の水準にまで減少している。同様に、中南部における一農場当たり平均農地面積も八〇年まで急減し、八〇年以降、世紀末まで一五〇エーカーと六〇年の二分の一以下の水準を推移していた。

しかも、南部では農地の改良が容易に進展せず、耕地化率はアメリカ全体のなかで最低だった。このため、一農場当たりの平均耕地面積は、東南部で七〇年に八〇エーカー、八〇と九〇年に五〇エーカー台であり、中南部でも七〇年以降、ほぼ五〇エーカー台を推移していた。⁽¹⁾

ところで綿作地帯では、この狭小な耕地総てに綿花が作付けされたわけではない。綿作農家の作付け規模は、技術的にみて綿花の摘み取り作業にどれほどの労働力を充当できるにかかっていた。綿花生産に特化している自作農の耕地面積は大きくても四五エーカー程度であり、このうち、綿花の作付面積は平均すると耕地面積の四〇％程

度だったといわれるから、綿作農家の綿花の作付面積は一五エーカー前後だったとみてよい。⁽²⁾

七〇年代前半でみるとエーカー当たりの綿花の平均収量は、〇・四二捆（二一〇ポンド）であった。そして、ポンド当たりの綿花の農場売渡し価格は、平均すると一二・一セントだったため、エーカー当たりの綿花粗収益は二五ドル前後となり、綿花作付地を一五エーカー前後有する農場では、三五〇〜四〇〇ドルの粗収益があった計算になる（第14表）。

そして、綿花の生産費は労働費用を入れてエーカー当たり一四〜一六ドル程度だったとみられ、この生産費を控除すると、さきの規模の綿作農場の純益は一〇〇〜一五〇ドルになったと推定される。⁽³⁾

ところで、六〇年代後半にサウス・カロライナ、ジョージア州など東南部における黒人労働者の年間賃銀（一〇カ月）は一〇〇ドル前後、ミシシッピ州などのデルタ地域やテキサス州などの西南部では一五〇ドル前後だった。⁽⁴⁾

一方、綿花の農場価格はポンド当たり一四セントを上回っていたため、こうした黒人労働を使用していたプランテーション経営者の収益は巨額にのぼった。そして、当時の綿花の生産費と南部における生活水準を前提にすると、プランテーション経営者のみならず、自作農民も綿作地以外の耕地に自給用の食料穀物を栽培することによって、綿花生産からの収益で農地を購入し、経営規模を拡大する余地があったとみられる。

農法的にみると、南部における綿作経営は、当時の中西部の穀作経営に比べてはるかに手作業に依存する度合いが高かった。主要な役畜は周知のように騾馬であり、これに簡単な農具をつけて耕耘、除草などの農作業を行っていたほか、収穫作業もほとんど手作業によっていた。このため、自作農の経営規模は技術的にみると騾馬の所有頭数と、家族の労働構成に依存することになった。⁽⁵⁾ 綿花価格が高騰した六〇年代後半から七〇年代前半に規模拡大を遂

げた一部の自作農は、七〇年代後半以降も肥料の増収により綿花の単収増をはかる一方で、食料および飼料穀物の栽培、家畜（豚、驃馬）の飼養頭数を増大させ、これによって経営基盤の安定を図っていたのである。⁽⁶⁾

七〇年代後半から八〇年代にかけても、綿花の農場価格はポンド当たり八セントと自家労賃分を含む生産費を上回っていた。このため、綿花作付地一五エーカーを有する農家の粗収益は二〇〇ドルを上回っており、⁽⁷⁾東部の賃銀労働者に比べると、その所得水準には格段の差があったものの、自給的な生活を主体としているかぎり、債務を負わなかったばかりでなく、節儉による貯蓄を農業投資にむけることも可能だった。ジョージア州では八〇年代に定額小作農を経て、自作農に向上したかなりの数の白人の分益小作農が存在していた。⁽⁸⁾

また、テキサス州の綿作地帯における自・小作農別の農業経営動向に関する農務省の調査報告書によると、八〇年代までに農業労働者（シェア・クロッパー）↓分益小作農↓自小作農という階梯を経て自作農に上昇する農民が存在し、農業階梯論が部分的にあてはまっていたといわれる。⁽⁹⁾

第15表は東南部、デルタ地域、および西南部の主要州における農場の経営規模別（農地面積別）階層構成をみたものである。一八七〇～一八〇年に農場数は、いずれの地域でも二倍前後に急増していたが、とくにテキサス州など西南部における農場数は、この一〇年間で三倍弱と急激な増加をみた。このような南部全体における農場数の急増にもかかわらず、農場の階層構成からみるといずれの州でも、七〇～八〇年に一〇〇～一五〇〇エーカーの農場数の構成比が急増したのが特徴であった。たとえば、東南部のサウス・カロライナ州、デルタ地域のミシシッピ州、西南部のテキサス州をとりあげてみよう。サウス・カロライナ州の場合、七〇年に農地面積が一〇〇エーカー以下の場数は、全農場の八五%を占め、一〇〇～一五〇〇エーカーの農場数の割合は、一四%にすぎなかった。ところが、

第15表 南部主要州における農場の規模別階層構成 (1870~1900年) (単位: %)

		~10 エーカー	10~20	20~50	50~100	100~500	500~ 1,000	1,000~
(イ)アラバマ 州	1870	6.7	13.5	39.4	20.8	17.4	1.7	0.5
	80	3.1	9.6	30.7	19.5	32.6	3.4	1.4
	90	3.2	7.6	32.9	19.3	33.4	2.6	1.0
	1900	5.1	9.3	36.2	21.4	26.6	1.2	0.4
(ロ)ジョージ ア州	1870	4.7	9.9	31.4	26.3	25.0	2.2	0.6
	80	2.4	6.3	26.3	18.8	38.7	5.1	2.5
	90	2.6	6.4	32.3	18.9	34.7	3.5	1.6
	1900	2.9	5.9	32.7	23.3	32.5	2.1	0.8
(ハ)ルイジア ナ州	1870	13.0	26.3	31.1	13.7	13.2	2.3	0.5
	80	6.1	13.9	26.1	17.6	31.1	4.5	2.7
	90	3.2	14.8	32.0	16.3	29.0	2.9	1.8
	1900	5.8	17.3	38.5	15.7	21.3	1.5	0.9
(ニ)ミシシッ ピ州	1870	16.2	13.2	38.3	17.6	13.1	1.3	0.3
	80	2.5	11.7	26.4	19.0	34.9	3.9	1.8
	90	2.0	12.5	33.5	18.1	30.2	2.5	1.1
	1900	3.3	16.1	38.9	17.9	22.6	1.1	0.4
(ホ)ノース・ カロライ ナ州	1870	7.5	13.5	39.4	20.8	17.4	1.7	0.5
	80	5.2	8.4	21.7	21.6	39.2	3.2	1.1
	90	4.9	8.3	23.2	22.6	37.6	2.5	0.8
	1900	6.1	9.2	26.7	24.5	32.2	1.5	0.4
(ヘ)サウス・ カロライ ナ州	1870	20.1	17.6	31.6	15.7	13.7	1.0	0.1
	80	7.7	13.3	29.3	14.5	29.5	3.9	1.7
	90	7.4	13.0	34.7	15.6	25.5	2.7	1.2
	1900	10.0	12.1	35.0	19.3	22.3	1.5	0.7
(ト)テネシー 州	1870	8.2	16.9	36.3	23.5	15.9	0.3	-
	80	3.7	10.5	21.0	23.9	38.2	2.1	0.7
	90	3.9	8.7	21.3	24.8	39.0	1.7	0.5
	1900	5.4	11.4	27.4	25.5	29.7	0.9	0.3
(チ)テキサス 州	1870	8.8	22.2	40.2	17.8	10.2	0.5	0.1
	80	2.1	9.6	25.1	17.0	40.7	3.4	2.2
	90	1.5	6.3	27.3	20.5	38.2	3.8	2.4
	1900	2.7	5.6	28.1	25.1	32.8	2.9	3.2

出典: 9th Census of the U.S., 1870, Vol. 3, p. 340. 12th Census of the U.S., 1900, Vol. 5, pp. 690-691 より。

八〇年には、一〇〇〜五〇〇エーカーの農地面積を所有する農場数の比率は三〇％に達している。

同様に、ミシシッピ州においても一〇〇〜五〇〇エーカーの農場の構成比は、七〇年の一三％から八〇年には三五％へ、テキサス州の場合では、七〇年の一〇％から八〇年には四一％へ、それぞれ急増している。いずれの州においても、七〇〜八〇年に五〇エーカー未満の零細農場の構成比が減少し、より農地所有面積の規模が大きい農場数の構成比が増大したのであった。

こうしてみると南北戦争後、七〇年代から八〇年代まで、綿花価格が比較的好調だった時期には、白人農民の場合、生産用具や農地を購入し、分益小作農↓定額小作農↓自作農へと上昇する者も存在したし、戦後、直ちに農地を購入した自作農の場合には農場規模を順調に拡大していたことが分る。

ところで、七〇年、八〇年代について白人、黒人農民別の農場の経営規模に関する統計数字は存在していない。⁽¹⁰⁾

白人農民の場合には七〇年代から八〇年代にかけて自作農への上昇、あるいは経営規模の拡大が可能であったが、大部分の黒人農民の場合には事情が異なっていたとみられる。彼らは南北戦争により奴隷の地位から解放されたといっても、経済的には無一文の状態で解放を迎えていた。戦争直後にはすでに述べたように黒人の多くは賃銀労働者としてプランテーションで雇用され、その後は法的には分益小作農という身分を与えられたが、農地を借用して綿花生産を始める際には、生産資金はいうにおよばず、生活資金も年初に地主や農村商人から融資を受けることが多く、債務奴隷的な性格が強い、いわゆるシェア・クロッパーだった。彼らは年初に受けた融資を年末に綿花の売上げ代金で返済していたが、支払い利子が手数料を含めて高かったこともあって、融資額を年末に支払いきれないケースが多かった。⁽¹¹⁾

第16表 ミシシッピ州、中央
部における黒人農家へ
の融資額(週当たり)

10ポンドの肉 (塩づけの豚肉)	ドル 1.35
コーン・ミール (1ブツシエル)	0.90
タバコ	0.10
合 計	2.35

出典: Carl Kelsey, *The Negro Farmer*, 1903, p. 41.

すこし時期が後になるが、黒人のクロッパの生活費の様子は第16表に具体的に示される。一九〇二年でみると黒人家族の週ごとの平均融資額は二・三五ドルであるから、年間では一二〇ドル前後となった。先に計算した農場の粗収益から地代を控除すると七〇〜八〇年代でも、この融資額を返済することは至難だったに相違ない。このため、生産用具を所有しないシェア・クロッパの場合には、綿花価格が好調な七〇〜八〇年代にも債務奴隷のくびきから容易には脱却できなかったのである。

ところで、生産用具を有し、生活資金を地主や農村商人からの信用に依存せず、しかも節儉に励む一部の黒人分益小作農の場合には、自作農に上昇する途が絶たれていたわけではない。⁽¹²⁾先のジョージア州を例にとると、八〇年代に黒人シェア・クロッパのなかでも定額小作農に上昇する者が多かったと指摘されている。ただし、白人の定額小作農の場合には、さらに自作農にまで上昇したのに対し、黒人の場合には定額小作農にまで折角上昇しながら、白人農民とは対照的に再び、多くはシェア・クロッパに転落していった。⁽¹³⁾テキサス州の事例でも、黒人の場合、分益小作農になりながらシェア・クロッパ、さらに賃銀労働者に転落する者が多いことが示されている。⁽¹⁴⁾

これは、黒人農民がプランテーションを離脱して定額小作農になった場合、入手しえた農地がシェア・クロッパの時よりも劣等地であったこと、⁽¹⁵⁾黒人が戦前から奴隷として使役されたため、自立した農民として自己陶冶される機会が少なく、黒人の農業経営能力が劣っていたことなどに起因していた。

このように、七〇～八〇年代には綿花価格が比較的好調なもとで、経営規模を拡大する農民が多かったが、こうした規模拡大を達成したのは、主として白人農民であり、黒人農民の場合には、その多くはシェア・クロッパーとして南部農村の最底辺層を形成していたのである。

ところで、八〇年代までの綿花価格が好調なもとでは、綿花の増産が当然、促がされた。そして、すでに三で考察したような南部に特有な作物質受け制を媒介とした信用・流通構造のもとでは、綿花農民は綿作のモノ・カルチュア経営に一層、特化することになり、この面からも綿花の増産は必然的だった。綿花生産量は八〇年の六六〇万梱から九〇年には八六五万梱に急増したが、こうした南部における綿花の供給事情に世界的な産業不況の深化が加わって、すでに四の一でみたように綿花価格は急落することになった。

そして、こうした綿花価格の急落のもとでは、八〇年代後半から九〇年代にかけて農民層の分解は、それまでと異なった様相を呈することになったのである。

注(1) とくに中南部における耕地化率は低かった。一八七〇～八〇年でも農地面積に占める耕地の比率は三一～三七%にすぎなく (*12th Census of the U.S. 1900*, Vol. 5, pp. 692-693)。

(2) 技術的にみて、綿花経営規模は農家の世帯員数が綿花を摘みうる耕地面積に依存していた (Warren, *Farm Management*, 1913, p. 274)。Warren が一九〇〇年にアラバマ州における典型的な綿花経営の白人自作農としている農民の綿花作付面積は一七エーカーであった。また、Vance (*op cit.*, pp. 74-75) によると、ミシシッピ州における平均的な黒人小作農は一エーカーの綿花作地と四エーカーのコーン地を割当られていたが、この計算の基礎となっていたのは、男性の農業労働者一人につき、六エーカーの綿作地と二エーカーのコーン農地を与えるということだった。さらに、M.B. Hammond, *The Cotton Industry*, 1897, p. 138 によると、南部全体をとってみると、一八六六年には綿花作付地は全耕地の四四%だったが、七六年には四一%になっている。

なお、綿花は非常に地力収奪的な作物であり、理想的には三年輪作が好ましい。このため、一定の単収を維持する必要からも、金肥の投下とともに輪作が必要となり、全耕地の三分の一にしか綿花は作付けされないことになった (C. W. Burkett, *Cotton*, 1908, pp. 111-113)。

- (3) M. B. Hammond, *op. cit.*, p. 169 によると、一八九五年でポンド当たり八セントの農場価格が収益を計上できる上限であった。時期は後になるが、一九一八年の綿花の生産費については、L. A. Moorhouse, *The Cost of Producing Cotton*, U. S. D. A., Bulletin No. 896, 1920 が詳しい。これは、アラバマ、ジョージア、サウスカロライナ、テキサスの八四二の綿作農場を抽出して、その生産費用を調査したものである。ここでは、生産費を計算するのに綿花生産に要した労働時間を調べ、それを当時の賃銀水準で換算し、さらに肥料などの諸経費を加算したものである。このようにして算出したポンド当たりの綿花の生産コストは地域によってかなりのばらつきがみられるものの、平均すると、二三セントになる。一九世紀後半から二〇世紀初頭では綿作経営で目立った技術進歩がみられなかったこと、一九一九年の賃銀水準は一九世紀後半（一九世紀後半を通して東南部における賃銀水準にはば一定——*Historical Statistics part I*, p. 163——だった）の約三倍だった。これらを勘案すると一九世紀後半における綿花の生産費は労賃コストを含めて、ポンド当たり七八セントであり、先の Hammond の数字と概ね、整合することになる。

- (4) M. B. Hammond, *op. cit.*, p. 125.
- (5) このため、驛馬の所有頭数のいかによって農村商人の農家への融資額は異なっていた。驛馬二頭を有している農家への月当たりの最高融資額は一〇ドルだったという (Carl, Kelsey, *op. cit.*, p. 43)。
- (6) 一農場当たりの肥料の投下額を一九〇〇年についてみると、アメリカのなかでは、東南部が最大で二四ドルとなっている。また、自小作別にみると、自作農の肥料支出額は小作農よりも、やや大きくなっている (*12th Census of U. S. 1900*, Vol. 5 pp. 142-145)。

- (7) エーカー当たり収量を三五ベール、農場価格をポンド当たり八・五セントとして計算した。
- (8) 定額小作農の場合、農業経営の効果は、生産者に帰属し、分益小作農の場合より、小作期間中に最大収量を得ようとの努力がみられた。そして、それが自作農への上昇の途につながった (R. P. Brooks, *op. cit.*, pp. 59-61)。なお、農民が自給食料を生産しているかどうかは農民の貧富の差を規定する重要な要因だった。この点については、Hawk, *op. cit.*,

p. 178.

- (6) J. T. Sanders, *Farm Ownership and Tenancy in the Black Prairie of Texas*, U.S.D.A., Bulletin No. 1068, pp. 33-38.

- (10) 白人、黒人農民別の農場の規模別構成は一九〇〇年センサスで始めて出てくる。

- (11) 通常、利子は掛け売りの値段のなかに込みで計上されていたが、利子率をあえて分離すると、年利にして三〇〜一一〇%程度だったと推定される (H.D. Woodman, *op. cit.*, p. 301)。掛け買いする場合、現金買いよりも二五%ほど割高だったというのが通説である (T.D. Clark, *op. cit.*, p. 28)。

- (12) 分益小作農も生産用具を所有していたかどうかによって二種類に区別された。だが、より重要なのは収穫期までの生活資金を有していたかどうかであった。生活資金を有する場合には経営的にも自立しており、節儉と経済環境によっては自作農に上昇できる可能性を有していたからである (B.H. Hibbard, *op. cit.*, p. 486)。

- (13) R.P. Brooks, *op. cit.*, pp. 61-62.

- (14) テキサス州の綿花地帯では、シェア・クロッパリーの六〇%がより下層の農業労働者に転落したという。そして、クロッパリーの特徴は、一農場への定住期間が平均二・三〜二・五年とごく短期間であること、とくに、綿作だけに特化するため農具や労働力を効率的に使用できないことなどが指摘されている。なお、消費目的のために短期資金に依存しがちであること、栄養状態が悪いため、病人が多く、この面からの失費も影響していたといわれる (J.T. Sanders, *op. cit.*, p. 34, pp. 46-48)。

- (15) R.P. Brooks, *op. cit.*, p. 65.

(三) 九〇年代の南部における農業不況の様相

一八九〇年にニューヨーク市場でポンド当たり一セントだった綿花価格は、すでに第一図でみたように、九二年には七・五セントに急落し、九三年には八セント台に一時的に反転するものの、その後、九九年まで価格は低水

一九世紀末のアメリカ南部における農業不況の特質

準を推移し、九八年には五セント台を割るにいたった。

農場価格も当然、ニューヨーク市場価格に連動して下落したが、農場での綿花の売り渡し価格が採算ベースのポンド当たり八セント台に達したのは、九〇年以降では九〇、九二年の二回しかなく、綿花価格は、九四年には四・六セント、九八年には五・七セントと採算価格ベースをはるかに下回って下落し続けた。⁽¹⁾

このように綿花の価格下落が大幅で、かつ長期におよんだ場合には、小作農ばかりでなく自作農を含めて、作物質受け制のもとでは農民の債務負担が増大し、その経済状態が劣悪化したことは想像に難くない。そして、債務奴隸化した農民は、こうした事態に対し、綿作への一層の特化による増産によって対応したが、このことは綿花価格をさらに低下させ、悪循環的に農民を債務状態に追いこむことになった。⁽²⁾ ミシシッピ州では、一八九二〜九六年に農民の農村商人への債務額は三倍に増大したと報告されている。⁽³⁾

また、ジョージア州の一農村における事例によると、綿花価格が最低水準を記録した一八九八年には、二七一世帯のうち破産し、売却された農家が三件、不払いの債務額が一〇〇ドル以上に増大した農家は六一件に達し、当該年度末の債務額が前年度末の債務額を上回った農家は、調査農家の七〇%に達した。⁽³⁾

タバコや綿花の単作経営が中心であったヴァージニア州南域でも事態は深刻だった。一八九〇年の報告では、農地のほとんどが放棄され、荒廢化し、農地はエーカー当たり二ドルという安値で売り出され、こうした傾向は益々強まりつつあったと報告されている。⁽⁴⁾

このように綿花および煙草の価格低落による南部における農業不況の進展は、八〇年代までの綿花価格の好調ななかで自作農に上昇した白人農民を再び小作農の地位に転落させた。累積した債務の決済は、結局、農地の処分に

よるほかはなかったからである。⁽⁵⁾ 東南部、中南部、いずれの地域でも一八九〇～一九〇〇年に全農家に占める小作農の比率は急激に上昇した。

東南部では小作農の比率は、この期間に三八・五%から四四・二%へ、西南部でも三八・五%から四八・六%へと上昇している。⁽⁶⁾ とくに、アラバマ、ジョージア、ルイジアナ、ミシシッピ、サウス・カロライナ州における小作農率の上昇は顕著で、これらの州では一九〇〇年に全農家の六〇%前後が小作農になっていた。また、南部のなかで一九世紀後半に最高の農場数の増加を記録していたテキサス州でも、小作農の伸びは急激で一九〇〇年に農場の半数が小作農に分類されるようになった。すでに、八〇年代までに黒人農民の大部分は小作農になっていたから、九〇年代における小作農の急増は、主として白人自作農が小作農に転落したことを意味していた。

この小作農の増加と並んで、この時期には八〇年代初頭までと異なり、農場の階層分化の点でも中規模農場の下層農場への転落が急激に進行したことが特徴である。東南部では農場全体に占める五〇エーカー未満の農場比率が一八八〇年の三五%から九〇年には三九%、さらに一九〇〇年には四三%へ、西南部でも、八〇年の三七%から九〇年には三八%、さらに一九〇〇年には四四%へと急増した。とくに、深南部のルイジアナ州、ミシシッピ州では一九〇〇年に五〇エーカー以下の農場の構成比は、それぞれ六〇%、五八%に達した。また、アパラチア山系に近接しているアラバマ、サウス・カロライナの両州でも、五〇エーカー以下の農場の構成比は一九〇〇年までに五〇%以上に増加した。とくに八〇～九〇年に比べ、九〇～一九〇〇年に下層農場の構成比が急増したのが特徴である（前掲第15表）。

このように八〇年代後半から九〇年代にかけて、南部では綿花価格の急落につれ、自作農の小作農への転落化、

貧農層の急増により農民の窮乏化が急激に進行したのである。しかし、単に、南部における一八八〇〜一九〇〇年の農民層分解を中規模農場の下層農場への転落と簡単にいい切ってしまうことにも注意しなければならない。

東南部、西南部いずれの地域でもこの時期に、農場数、農地面積も全体としてみると増大していた（前掲第5表）。このなかで、農場の絶対数でも五〇エーカー以下の農場数の急増が目立っていたが、これは中規模農場の下層農場への転落現象と同時に、下層農場で農業への新規参入が増大していたことを意味する。農業への新規参入は、農村人口の自然増と移民流入の二要因によるが、こうした新規参入の農民は、大農場が、いくつかの小規模な小作農場に分割されたのを、賃借する場合がおおかつたとみられる。事実、東南部では五〇〇エーカー以上の農場数が、一八九〇年から急減したが、これは下層農および小作農の増加と対応した現象であった。また、西南部では、九〇〜一九〇〇年に大規模農場は減少していない。このため、開発の余地のあった西南部では、劣等地への入植という形で、下層農の増大によって農場数が増加したものとみられる。しかし、いずれにしろ、農村における過剰人口を背景に、農業不況の深化のなかで下層農場が急増したのであった。

この結果、南部では農地の耕地化率は四〇%前後であったから、農地面積が五〇エーカー以下の農場が全体の半ばに達した。このことは、約半数の農場の平均耕地面積が二〇エーカー以下に減少したことを意味した。こうした事態のなかで債務を負う農民が当然増加したが、債務を免れたのは、自給作物を栽培し比較的経営の多角化を進めていた農民のみであった。⁽⁸⁾

アメリカのなかでも中西部では、農民への信用供与方式は農場抵当融資が中心であった。八〇年代末から九〇年代前半にかけて、この地域では穀物価格の急落により農場の抵当流れが増大し、この過程で多数の自作農が小作農

に零落した⁽⁹⁾。これに對し、南部では農民は農村商人に全面的に信用を依存していたが、農場で栽培されている現金作物が信用担保（作物質受け制）としてとられていた。そして、南部では世紀末の農業不況のなかで作物質受け制を媒介として農民の債務奴隸化が進み、自作農の小作農への転落が促進されていた。資金不足の農民は、作物質受け制のもとで綿花生産への特化を余儀なくされたが、綿花生産への特化は綿花の増産を促し、この結果、必然的に価格低落をまねき、農民の債務奴隸化が一層、促進されたからである。戦後、南部において農業發展を妨げていた元凶である作物質受け制は、この過程で一層、強められたのである。⁽¹⁰⁾

ところで、中西部の場合には農業不況の過程で、そこからの脱却を求めて農業経営の多角化（穀物の単作経営から家畜飼育と穀物生産との有機的な結合）が図られたり、穀物の単作経営の場合にも農業経営の機械化により、家族労作的な経営をベースにしながらも農業生産力の上昇が実現された。そして、この農業生産力の向上を背景に二〇世紀に入ってから農業好況のなかで、農場の規模拡大が実現していった。

しかし、南部の場合には一八九〇年代の農業不況のなかで、農業経営の改善、農業生産力の向上は遂に図られなかった。二〇世紀に入って綿花価格が上昇するなかで農家の経営収支は好転するものの、一農場当たりの平均農地面積は逆に減少し、農場全体に占める小作農の比率も増加した。⁽¹¹⁾作物質受け制のもとで信用・流通面から農業経営が制約を受けるという「後進的」な条件を依然として維持したまま一九三〇年代の大不況を迎えるのである。⁽¹²⁾

ところで、一八九〇年代の南部における農業不況の要因をどこに求めたらよいだろうか。南北戦争後、南部においては東部と異なり目立った工業發展がみられなかった。このため、農村に過剰労働力が堆積し、他の地域と比べると相対的に零細農耕制が維持されざるをえなかった。このことが農業経営の發展にとって主要な阻害要因になっ

ていたことはいうまでもない。さらに、アメリカの綿花生産は一九世紀後半における世界的な綿工業の発展を原料面から支えていたが、綿花が主要な工業原料品であったがために、他の農産物以上にその価格動向（その結果として綿作農民の経営収支も）は世界的な景気動向に左右されざるをえなかった。

こうした南部農業をめぐる外部的要因と並んで重要なのは、すでに本論で繰り返し展開してきたように、大部分の南部農民が作物質受け制によって農村商人に信用面で従属し、このため、綿花、煙草などのモノ・カルチュア経営が進展し、南部では農場の経営基盤が脆弱化していたことである。この作物質受け制は、すでに考察してきたように戦前にプランテーション経営者に信用を供与していた仲買業者が没落した後に農村商人が台頭し、綿花の流通機構を再編する過程で生じたものである。戦前にプランターの農場経営と仲買業者の信用活動とが密接に結びついていたように、農村商人の信用活動も再編プランテーション経営と結びつき、戦後、白人小農民、小作農民が綿作経営の中心となったことと関連していた。農村商人の信用活動が農民の生活、生産の両面にまでおよび、綿花の収穫代金で信用決済をする構造は、戦前に仲買業者がプランターに与えていた信用方式と同じであり、そのミニチュア版でもあった。

戦後、こうした信用方式が南部に定着するのは、形式的にみると戦前の仲買業者の信用方式を農村商人が踏襲したからであった。しかし、それが可能となり、南部農業の発展にとって輓になったばかりでなく、農業不況を深化させる一大要因となったのは、奴隷として使役されていた黒人はいうにおよばず、市場から隔絶されていた白人下層農民も、自己資金を蓄積できる経済的条件を戦前には有していなかったという歴史的條件に起因している。

最後に、南部における農業不況を深化させた一要因として、Vanceなどが強調するいわゆる“human factor”を

指摘しなければならない。

黒人農民に典型的にみられるように、南部の農民が総じて、自立的な農業経営者として陶冶されていなかったことが農業経営の多角化を妨げ、世紀末の南部における農業不況を深化させたという考えである。とくに、黒人の場合、戦前には、プランテーション内で栽培されていた作物の栽培方法しか知らず、これが戦後にもそのまま引き継がれていた。また戦前に市場経営から隔離され、自給的な農業生産に従事していた白人農民も、中西部などの農民に比べると市場向けの農業経営者としての経験が少なく、経営者資質という面で劣っていた。このように、戦後の南部農民の農業経営者としての自立性の欠如は、戦前における南部の経済構造から生み出されたものであった。

このようにみるならば、世紀末の南部における農業不況は、世界的な景気動向という外的条件に規定されながらも、それを一層、増幅させていたのは戦後の南部に固有な社会・経済的条件であり、それは、また奴隷制度に代表される戦前における南部の経済構造に歴史的遠因を有するものであった。そして、戦後の南部経済の再建は、こうした戦前の南部社会を規定していた社会・経済的条件を完全に払拭するという形では進まなかったことが、世紀末の農業不況を深化させる背景になっていたのである。

注(1) 53rd Congress Report, *op. cit.*, p. iv.

(2) T. D. Clark, *op. cit.*, p. 42.

(3) Carl, Kelsey, *op. cit.*, p. 51.

(4) W. D. Sheldon, *op. cit.*, p. 10.

(5) T. D. Clark, *op. cit.*, p. 43.

(6) 12th Census of the U. S. 1900, Vol. 5, p. lxxvii, なお、農地を喪失した自作農のうち、かなりの部分が都市部に移

住したといわれる (C. W. Burkett, *op. cit.*, p. 36)。

- (7) 農場数の増加のうち、農村人口の自然増により成年に達した農民が新たな独立した経営主体として農業に参入したものがどのくらいの割合で、入植によるものがどのくらいだったかは明らかでない。しかし、ミシシッピ、ルイジアナ、アーカンソー、テキサス州などのデルタおよび西南部地域においては、コロライナ、ジョージア州などの旧南部地域より人口の伸び率が高かったこと (D. B. Dodd & W. S. Dodd, *Historical Statistics of the South 1790-1970*, 1973, pp. 257)。土地にも余裕があったことなどから推定して、西南部では当然、東南部よりも入植者による農場の増加が多かったとみられる。ただ、西南部は入植地として中西部より劣っていたので、この地域への入植者は経済条件に恵まれない者が比較的多く、このため、下層農を形成したと思われる。

- (8) 53rd Congress Report, *op. cit.*, p. iii. なお、この議会報告書は、綿作農民の今後の経済状態を改善する方策として、経営の多角化を最善の方策として勧告している。経営の多角化により綿花の供給増を抑え、価格の好転を図り、さらにこれにより農村商人からの信用供与を最少限に抑え、作物質受け制からの脱却を図るという考えに基づいていた (*ibid.*, pp. xlii~xliiv)。

- (9) この点については、拙稿「一九世紀後半のアメリカにおける農民運動の展開(四)——中西部を中心として——」(『農業総合研究』第三巻第四号、所収)参照。

- (10) しかし、同じ南部であっても綿花や煙草のモノ・カルチュア経営が支配的でない大西洋沿岸地域では、農業経営の多角化が進み、都市近郊的な農業経営の進展もみられ、農業不況から免れていた。例えば、ヴァージニア州の北域では単作経営の南域とは対照的に、一八九〇年代に農業経営は安定していた (Sheldon, *op. cit.*, p. 15)。

- (11) 例えば、一九〇〇～一九一〇年に小作農の比率は、東南部においては四八・一％から五〇・七％、中南部でも四九・一％から五二・八％へと増大している。また、一農場当たり平均農地面積も、東南部では一九〇〇年の九〇エーカーから一九一〇年には七八エーカーへと減少している。同様に、中南部における一農場当たり平均農地面積の減少も目立っている。これは、中西部における農場の経営動向と対照的な動きである (13th Census of the U.S., Vol. 5, p. 75)。

- (12) 二〇世紀に入ると、一九三〇年代までの南部、とくに東南部における農業動向については R. B. Vance, *All These People*, 1945, pp. 154-244 が詳しい。

五 おわりに

これまで、南北戦争後の南部における農業生産構造の変化、プランテーション経営の再編の実態とその意義について分析し、そのうえで一九世紀末の南部における農業不況の性格について考察を進めてきた。このうち、農業生産構造の変化、プランテーション経営の再編については、いくつかのまだ紹介されていない文献に依拠しながらも、基本的にはこれまでの日本における研究成果を再確認したという域を出ていない。

本稿は、むしろ南部における農業不況の性格と、それを規定していた諸要因を抽出することを課題としている。それは、これまでの筆者の一九世紀後半のアメリカの農民運動についての研究関心によるものである。すなわち、南部では世紀末に中西部と並んでポピュリスト運動という形で農民運動が高揚したが、その経済的背景を中西部と対照しながら究明するということである。

南部における世紀末の農業不況の性格については、本論で考察したとおりであるが、最後に本稿で充分、展開しえなかつたいくつかの問題点を指摘しておこう。

第一は、地域での農村商人の信用・商業業務についてである。戦後、かつての仲買業者に代わって農村商人が地方市場での綿花取引の中心になるが、農村商人の出自については必ずしも明らかでない。農村商人の出自を含めて彼らの信用・商業業務をより具体的に解明することは、戦前と比べて南部の農村経済がどのように戦後に変容したかを知る重要な手がかりになる。それは、同時に戦前にプランテーション経営に包摂されていなかった白人農民が商品経済にどの程度、関与していたかを知るうえでも重要である。

第二に、地方市場↓内陸部の中央市場↓東部市場をつなぐ綿花取引と綿花金融のあり方についての問題である。本論でも言及したように、農村商人の資金源が東部の金融市場に依存していたことをもって、日本では直ちに南部経済が東部に金融的に従属をしていたと結論づける見解が多い。筆者はこうした見解に必ずしも与しないが、南部経済をアメリカ資本主義のなかでどう位置づけるかという場合、南部経済と東部の金融市場とのかわり方、とりわけ綿花金融のあり方を具体的に説明することは必須の課題である。

第三に、南部における地域差をもっと考慮にいれて、この時期の農民層の分解、農業不況の動向を分析する必要性についてである。南部と一口にいっても、大西洋沿岸地域、アパラチア地域、デルタ地域、西南部と地域に応じて農業経営の歴史的な発達過程も異なったし、自然的、地理的条件にも大きな差異が存在した。

このため、当然、農業経営の内容、農業不況の様相の点でも大きな地域差が存在したはずである。本稿では、センサスの区分に従って、東南部と西南部とにのみ地域区分して、概観的な考察を進めてきたが、本稿のような叙述の仕方では、南部における地域差の問題を十分に説明したとはいえないだろう。最後に、戦後、現金作物を生産するようになった白人小農民の経済的ステータスの問題である。白人小農民の経済状態は明らかに黒人のシェア・クロッパより上位にあったが、彼らの農場経営の内容、農村商人との関係などを明らかにする資料は限られている。戦後の南部における農民運動を考察する際には、黒人農民の政治行動と対比して白人小農民の政治主張、政治行動を説明することが必要になる。そして、白人小農民の政治行動を分析する際には、一九世紀後半を通して彼らの経済状態についての詳細な研究が必要であることは言うまでもない。本稿は、南北戦争後の南部農業に関する研究の第一歩にしかすぎない。上述した諸問題については今後、説明すべき課題としたい。